
闇小説

一文字 誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇小説

【Nコード】

N2260C

【作者名】

一文字 誠

【あらすじ】

それに目を通し終えたとき、ある者は火を奪われ、ある者は時の橋を渡り、ある者は名画を手にした。西崎達也は独走の成績を有す高校生。しかし、とある女子が“その秘密”を暴くとき、彼の行動に選択肢は残されていなかった。闇小説の破壊という声に、服従する以外には。

MOVE 1 「所業」

男子高生の部屋。

と言うと何を思い浮かべるだろうか。

折れ目のついた雑誌が散らばる中で、若年層を賑わしている最新のゲーム機器が一つ二つ、三つ四つと数えることができれば、粉雪さながらの埃をまとりつかせ、蛇さながらに絡み合うコードも然りと思う。

しわだらけのベッド、ハンガーに掛かった制服、教科書の並ぶ勉強机がお約束なら、引き出し等の“制限付き教材”はご愛嬌と言ったところに違いない。

ここまで単語を並べておきながらではあるが、今回の部屋は主含めそれとは真逆なもので、咳一つためらわせる程に清潔感が漂っている。

青年は勉強机にいた。

優等生を絵に描いたような髪、顔、服装、そして無論の成績。そんな人間が勉強机でやることなど言うまでもないが、それに誰もが騙されてきた。

青年は今、教科書やノートの板書を紙切れへ小さく書き写している。

青年は今、ある方法でゼロハンテープにそれを転写しようとしている。

これで皆目見当がつかないという人も、さらにこの後彼がそのテープをテストなどの問題用紙に貼り付けると言えば、もしやと思うだろう。問題文と同化したテープの存在など誰も見抜けない、それが完全犯罪成立の瞬間である。

青年、西崎達也。

彼の微笑の訳を、誰一人知る者はいなかった。

帰宅前のHR時になり、サラリーマン風の担任教師が機械的に列へ、列へとプリントを配布していく。達也は教壇から二つ目の席に座っていたが、最初に目を通した生徒の反応を見れば、大体の予想がついた。

試験範囲を記したものだ。

（やっと期末か……）

気を抜けばこぼれ出そうな冷笑を抑えつつ、自分もざっと目を流してみる。

舌を打った。

（日本史のボケが。話より範囲が増えてんじゃねえか）

途端にノイズと化す雑談。耳を傾けてみると、それはやがて見えない塊となって自分を持ち上げていくような、そんな錯覚を引き起こした。不快という訳ではなく、ただ家の塀同然の存在である。

——期末を一週間前に控えたわけですが——

担任の声が飛び出すも耳から耳にすり抜けるというやつで、達也は聞き入るフリをしてその後ろの黒板はどれほどの面積を持っているだろうか、雪山で乗ればどれほどの加速度がつくだろうかぐらいの、他愛もないことを考えていた。先公の御託を聞く者など、所詮片手で数えるほどしかないのだから。

終礼が終わると半数はすぐ家路に、しかし半数は制カバンへ教科書を入れようとさえしなかった。

最近流行の勝ちと負けに分けられた組、その言葉が一瞬達也の脳裏に浮かんだ。

勝者を妬み敗者を哀れんだのか、はたまた勝者を賛美し敗者を卑下したのか。どちらにせよ、馬鹿げた談笑を尻目にすれば答えは決まっていた。

（……負け犬が）

達也がイスを引く。

そのとき一人の男子生徒が飛び込んできた。

「おっ、ちょい待った西崎！ ノート貸してくれ、ノート」

「またか」

こんな達也でも友達はある。

桜木勝平というこの男、クラスには一人二人いるであろう元気で活発で、誰とでも……と悪く言えば希少価値がない人間に加え、姿形ひとつとっても想像内のはみ出し夏服、意図的な髪型、ポケットから垂れ下がったチェーンは典型的な現代っ子である。

「お前のノート見やすくてさあ、ホラ、やっぱり成績いいやつは違うって言うの？」

パラパラとノートを眺めがてら、桜木は手前の席に体を投げつけた。

窓に目をやる達也、そこには空の色に薄められながらも自分と桜木が確かに映っている。

どことなく。

窓の自分は、座っている桜木に対して立っている自分は、桜木と見比べた自分は、目を影に潜めて微笑している気がした。

「西崎は文句なしの理系だよな。俺なんか最近、文系の方が向いてたんじゃねえの？ って思えてきてよお」

達也が顔を戻す。そこには笑みなど消えうせ、いつもの涼しげな顔があった。

「まだ二年だから先のことはわかんないけどな。でも、せっかく選んだ二つに一つの理系だろ？ 文転は早合点じゃないのか？」

いすを寄せる桜木。

「……だよなあ？ そーだよな、まだ俺ら二年だしどうにでもなるよな。いや、流石西崎。ノートだけに留まらず口も違々と来たか」

桜木は曇りなき表情で達也を見据え、声の調子に合わせてノートを上下させる。が、達也はいすを引いたときの音が不快で、思わず目を細めてしまった。

「ああ、そ、それでよ。大学とかどこ考えてんの？ やっぱ国立か」「まあ……そうだな、私立は学費かかるから」

それから桜木は大学の話をわずかに留め、隣のクラスで噂になっ

ていた男女がけんかした、教頭が嫁に逃げられた、今年の夏は女子と海に行く、など平凡な話題へ移っていった。達也が話の受身に回ろうするもののどうにもこうにも桜木の口は黙らない。いつもなら体よく都合をつけて、今頃家路についているはずなのだ。

永遠にさえ思えるほど、時が経った。

教室を包むチャイム音。

それは達也にとって、耳から脳ヘクラシックが流れたも同然であった。

「うっわ、マジありえねえ！ ふつーに塾遅刻だし」

「もう学校閉め出す時間だったんだな」

「ああ、そうらしい」

バタバタとイスから離れ、桜木が傷んだ制カバンに手をかける。

「西崎ほんつと勘弁な、あとこれ明日返すから」

「わかった。じゃな」

おう、を最後の言葉に桜木は、小走りの中でノートをカバンに入れようとしていた。カバン同様に傷まないことを願うばかりである。

「……じゃな、か」

教室は達也一人だった。

イスがあらゆる方向を向き、また机も数席ほど列から蛇行している。そこに押し込まれたプリントは、陰ながら不様な折り目を覗かせていた。

夏場は日の暮れが遅いものだが、外は若干の暗みを漂わせ、窓を介し年輪の机を寂しげに照らしている。それは達也にとってどこか小気味良さを感じさせた。

ふとカバンを開ける達也。

そして、日焼けなど知らぬ存ぜぬの白い手は冷ややかに、あのテープを取り出した。

一見すれば何重にも巻かれたセロハンの車輪、しかしそれもカモフラージュ兼粘着力の消耗を抑えるための一策にすぎない。いつもなら誰もが追い込みを始めるギリギリのテスト前日を狙い、机下に

テープを張って下準備を済ませるところだ、そうすることでなんら怪しまれず、教室に一人という状況を作り出せる。

達也はテープを引いた。

（持つべきものは友人だな、桜木）

あの長話のおかげで誰にも怪しまれず、こうして教室に残ることができた。日本史は計画が狂ったものの、国語と英語はすでに手を打ってある。ここで断っておくが、達也がカンニングをしているのは文系科目だけであり、理系科目に至っては相手が目を見開かすほどの実力を備え、同時にプライドも持っている。

つまり、そのプライドが文系という畑違いの勉強を拒否し、カンニングに走らせたのだ。

机の裏に“仕掛け”を備えると、青年は優等生に戻っていた。

何食わぬ顔で席を正し、傷ひとつ見えない制カバンを片手に髪をなびかせ出口へ目をやる。

ギョツとした。

（しまっ……）

そこに直立不動でいたのは、一人の女子生徒だった。

MOVE 1 「所業」(後書き)

まずは初めまして、一文字 誠です。

そしてこの小説に目を留めてもらったばかりか、後書きにまで目を通してもらっている読者の方には、感謝感激であります！

小説としましては今までになかったものを書きたいと思い、こちらのサイトを題材にさせてもらいましたが、『小説』という単語自体、もう少し話数が進んでから……という程、話は遅く、まだ新ジャンルが追加されていないときと時間軸がずれるかもしれませんが、自身初の完結までお付き合いしてもらえば光栄です。ではこれからもよろしくおねがいします！！

MOVE 2 「ひび」

「あれ、こんな時間にまだいたんだね」

きつちりとした制服、肩までの落ち着いた黒髪、相手をぼんやりと見据える大きい目、それはなぜか不信感を持つ気になれなくした。達也と同じ学年バッジをつけているが、クラスでは見たことがない。

「……ちよっと、友達と話し込んで」

落ち着け。

そう自分に言い聞かせ、達也は平常心を装った。

胸に手を当てれば嫌でもわかるこの鼓動さえ、まだ相手には知れていない。このとき達也は、妙な話だが、相手にはバレていないという五分の自信があった。

「教室とお話してたの？」

「え？」

「ここにいたのは、君一人だけ」

一瞬、遠まわしにカンニングのことを言われた気がしたが、達也は違うと踏んだ。理由は直感、そして案の定桜木のことを話すと、女子生徒は、納得したのか小さく微笑んだ。だがそれで終わらなかった。

教室に入る女子生徒。

「君、西崎君だよね？」

心臓が揺れた。

どうして自分の名を、そう何気なく聞こうとして言葉が詰まった。俗に言う頭の中が真っ白、というやつである。

そんな痛恨の動揺を知ってか知らずか、女子生徒は“西崎達也君”と確かめる様にこちらのフルネームを呟き、煙のように、足音も限りなく無音に近づけ、教壇に登った。

達也との間合い、わずか二席分。

落ち着け。

その単語を、達也もまた心の中で呟く。こんな小心でよくカンニングなどできたものだと思うが、これはこれで本人が一番ショックを受けている。状況は文字通りの想定外、いつもなら聴覚と第六感をフルにして作業を行うため、こんなことにはまずならない。今回は学生なだけにケアレス・ミスを犯してしまったという訳である。

一瞬机に目を落として戻し、達也は苦笑いで教壇の女子生徒と目を合わせた。

「いや、ごめんごめん、ボクっとして。君の言う通り、確かに俺は西崎達也。その、さっきはさ、いきなり名前口にされたからビックリして……、俺、君のこと全く知らないしさ。あ、ひょっとしてどこかで一度会ったとか？ 理系クラスって組も人数も多いし、俺記憶力良くないから……」

「一条弥生」

数秒の沈黙の後、彼女、一条弥生は静かに目を閉じた。

これに対し、

「……ああ、それが君の」

「西崎君は私が産んだ男の子」
開眼の達也。

またも言葉を見失ったのか、何か言おうにも「え」や「へ」などの文字ばかりが口について出てきてしまう。こうなると、もはや壊れたオモチャである。

「だったのかも知れないし」

そして一条が、また静かに目を開けた。

依然ぼんやりとさせているそれは、挙動不審な達也とは正反対な表情。

「恒久の愛を誓った恋人同士、優しくてたくましいあたしのお父さん、妥協しそうになったときいつも叱ってくれる先生……だったのかもしれない」

「あ……あのさ、それって何を」

この返答に、一条はまず笑みで答えた。

「輪廻転生っていつてね、人間はみんな何度も、何度も生まれ変わってこの世にいるの。そしてこの世で出会う人達はみんな前世で一度、なんらかの形で出会ってるんだよ。でも前世の記憶は消えちゃうから、誰もそのことは覚えてないの。あたしもさっき前世を思い出そうとしてみたけど、やっぱり西崎君のことは覚えてなかったんだ。この世では、これが初めての出会いみたいだね」

達也はただ直立不動だった。

見れば見るほどに、話せば話すほどに、この女がややこしい宗教の信者にも、ただ天然なだけの人間にも思えてきて、一向にあの真偽がわからない。

（何かを隠してやがる……ようには見えねえんだがな。俺の杞憂か）

この際、もう自分の名前の出所はどうでもよかった。しかしこちらの秘密を見たとなると、法を犯す覚悟も必要になってくる。

汗を拳で包み込み、達也が口を開いた。

「それで、俺に何か用？」

「何も。ここの鍵閉めにきただけ」

拳が緩んだ。

同時に唇も緩んだ気がした。

話を聞くにこの一条、自分の友達がこのクラスにいて、今日日直に当たっていたものの忘れて帰ってしまい、偶々学校に残っていた自分に頼んできたためここにいるのだと言う。なるほど、ならば達也のこともその友達とやらの聞いたのだろう、座席位置からの判別など容易い。

「でも“頼む”って……ここ携帯ダメだったはずじゃ」

「ポケベルなら問題ないでしょ？」

「え、そんなものまだ使……」

「嘘、だよ」

「へ？」

「図書室にいたの。メール来たときは、ちょっとビックリしちゃっ

たかな」

一条の調子が変わらなかった。

カンニングという仮名五文字、それが彼女の口から出る気配はなく、やはりタイミングを伺っているとも思えない。ゆえに達也は結論を出した。

——見ちゃいない、この女は何も——

冷静に考えてみても、机の中にテープの一つや二つ貼っているところを目撃して、これがカンニングの下準備だと誰が推測できようか。不審に思えばその場で問うはず、一条が本当に見ていれば問うはず、だが彼女は疑心を片鱗も持っていなかった。

達也は制カバンの持ち手を逆にし、ポケットの中のハンカチを握り締めて、わずかに残った汗を拭いた。

「……一条さんだっけ。鍵閉め、手伝おっか？」

乱れのない歯並びを少し見せ、いかにも善意を示す達也の顔。達也が人目に見せるのは、いや使うのは、いつもこの仮面である。

「ううん、一人で大丈夫だから」

「……そう？　じゃあ、俺はこれで」

それで達也の好意は終わった。

もうこの女とは会うまい、不意に勘が囁くが、疑う理由はない。

この直感こそ、今しがた達也を安堵させた絶対の秘薬であり、また武器でもあったのだから。

青年の足音が消えるころ、教室はおろか、その階で一条は一人になった。

語彙が乏しいことこの上ないが、一言で表すと、無音という二字が当てはまる。一条が声を発せば、階全域に聞こえそうなほどの静けさ。それはまた、一種の恐怖などを覚えるかもしれない。

しかし恐怖ならば、どんな形であれ実際に起こってこそ、である。

「西崎君は、やさしいんだね」

一条が呟く。

ヤサシイ。

さっき発しなかった掠れ声、でそう言うと、彼女の目は達也の机に向いた。

「……だけど」

背筋よろしく、エリート面して家路に向かう達也。

死霊のような冷笑を漏らす一条。

二人の対比は、瓦解という名が相応しい絵だった。

MOVE 3 「接触」

クシヤクシヤッと丸められた紙は、鮮やかな木目の、下敷きのよ
うな床の上を転がった。

横着をした末に、ゴミ箱へ投げこみ損ねるとよくこうなる。なっ
たらなったで二度手間で、不愉快で、達也の部屋では尚更だった。

「……くそ、あの女が」

肘を立て、両の手を眼前で組む達也。

独り言で自分が腹を立てている訳を、わざわざ言う者はいない。
彼を苛立たせている元凶は、今しがたの紙くずであった。

一条弥生。

そこにはズバリこの名が載っている、文系クラスにおける成績最
優秀者として。

勿論同姓同名を疑って、二年進級時に配布されたクラス表にも目
を通した。目を通して、プリントの端を握り潰した。

文系と理系、達也はこの二つを完全に切り離して考えている。自
分は理系なのだと、そしてそこで、自分はトップの実力を兼ね揃え
ているのだと。だから数時間前に会った一条も、やはり自分の下に
いる者として見ていたのだ。

文系と理系、達也はこの二つを完全に切り離して考えている。

だが一条もトップだ。自分と同じトップ。

勝っていると思っていた相手に、同着と示される。達也にとって、
それは、大敗と紙一重の差もない、同義のものだった。

——彼女は頑張ったんだろう。その努力に心から拍手を——

今の達也にこういう言葉を投げかければ、『ヘドの出る善人口調
だな』と賛美されること相違ない。そう、今の、達也には。

カチッと鳴り、やはりまたカチッと鳴る秒針。気にすればうるさ
いものの気にしなければ、のこれだけが達也の耳を訪れていた。白

い壁の、天井付近へ掛けられた時計は一見すると古時計だが、高級家具材を仕込ませたものとも見て取れる。視線を下げれば、山折られ谷折られた軌跡を残す世界地図が、これまた広く場所を取っていた。

大きい音を作りそうなものは見当たらない。しかし外は雨が降っていた。

田の字状の窓を、途切れ途切れの直線が殴りつけ、水滴が潰れ、ひゆるひゆると滑っていく。情けない曲線の跡は、なめくじの粘液を連想させ、それが雨音と雨粒を隔てているはずの窓に、ゆっくり染み込んでいく気がした。

ゆっくりと立ち上がる達也。

外は街灯だけが、見えていた。

十分に寝つけないままの起床、そのときに見る陽光ほど無神経なものはない。

結局、勉強らしい勉強は何もできずに朝を迎えてしまった。いくら自信家の達也でも、一週間前にしてこのザマとなると気は重い。

加えてあの者。

確かに手落ちはあった。だがこちらの弱みは死守した。

そして今日、その確信は憶測に降格していた。

（あいつはあの後、教室で鍵閉めを終わらせて帰った。本当にそうなのか？ 単純作業だけの割には、妙に喋りな奴だったな……）
時間が経ったためか、記憶も僅かながらに欠落を見せ始めている。しかしながらその中でも、一条がカンニングについて、何一つ口にしなかった部分は脳裏に焼きついていた。これが昨日の確信の根で、今日の憶測の先端だ。

聞いている方もイライラする程の堂々巡り、もう何度安心と不安を行き来したかも知れず、達也自身の精神もショート寸前だった。だが不安が疲れなど見せるはずもなく、地位と未来を人質にした悪魔は、依然として、青年の背後で肩を上下させている。

達也は時計に目をやって、制服へ手をかけた。手をかけてその十分と数分後、

「じゃ、行ってきます」

玄関の戸を開く音がした。

いつもより一時間前の早出が、両親の見送りの声を遅らせる。達也が打った次の手は、忘却、即ち一条の存在を忘れることだった。とにかく一条に会わない、最悪の事態になったとしても、自分と一条の接触を見た者がいないのだから、証拠を崩せる可能性も残っている。

現状況の中、最も手堅い策だと、そう心の中で繰り返し、達也は足取りを軽くしたのだった。

「あれ、奇遇だね」
なぜだ。

自問し、自問して、達也は自責の念に駆られた。

同じ車両で、同じ列の吊革で、ちょうど隣り合っている自分と一条。これは言うまでもなく、早出が失策になったことを意味していた。

一条は吊革へ体重を掛け、

「同じ時間、だったんだ」

と、うつ向き気味な、達也の顔を覗いた。

一瞬、その視線に達也も合わせたが、今度は顔を上げて、幾重にも指紋の跡を残す窓へ目をやった。しかし地下鉄の外は、言いようのない暗闇が続いている。

「いや、今日は偶々早く起きたんだ」

のどから出た偽善ぶるでもなく、偽悪ぶるでもない声。それはあたかも、豹が獲物から逃げるかのような奇妙さを持っていた。

「もうすぐ、だったんだよね。あたし達の期末試験」

「うん。前回より出題範囲が広くなってる割に、内容は濃いまま。もう少しこっちのことも考えてくれたって……ああ、そっちはどうか知らな」

「いつあたしのこと探ったの」

ガタン、と車両が震えた。

だが達也は視線を止めたまま、後のカタン、カタンカタン……という電車お決まりの音を傍聴し、表情にだけは出すまいと、顔の筋肉に神経を尖らせた。

「……さ、探るって。何で？」

顔を向け、達也が苦笑を見せる。

その間に窓を介さず両眼で直視した一条の顔は、昨日の顔だった。何も物語らず、まるで彼女にしか見えない何かを見るような、あのぼんやりとした目が二つある顔。

その口が動く。

「昨日西崎君がいたのは数ある理系のクラス、だから西崎君が理系なのは誰からも明白だね。でも、あたしはどうか？　理系と見間違うならわかるけど、さっき」

——あたし達の期末試験——

——ああ、そっちはどうか——

達也の苦笑は消えた。

“あたし達”と言えば、理系も文系も指すことになるが、達也が“そっち”と言った場合、一条が文系だと知っていたことになる。

昨日も今日も、彼女本人がそう言ってなかったにも関わらず。

「いや、これはその」

と言いかけて制した。

自分は、どこぞの三流芝居を演じている訳ではない。ここでそんな台詞を吐けば、必ずや、崩壊の未来を呼び、あの秘密を悟られる。当然、今の視線を逸らしてもそれは同じこと。

その時だった。

達也は笑った。あたかも、プロが許されるミスを犯したときのように。

「早起きは三文の得って言うけど、慣れないことをするのはまた別の話だね。今の俺みたいにな」

さらに達也は視線を逸らし、再び地下鉄の外へ目をやった。

「ずっと雨が降ってて昨日の夜もこれ位暗かったよ。プリント整理だけで深夜まで食い込んだから、今日の朝学校で巻き返そうと思ったけど……まだ頭が起きてないんだろなあ。そりゃ変に思われても仕方ないよね」

「……似てる」

と、同じく窓を見る一条。

「雁の末造って人に」

「誰？ それ」

横目で一条を伺うも、すでに達也の心から動揺は消え去っていた。代わりに、詐欺師にも似た悪意の達成感を残して。

「雁は森鷗外っていう人が書いた小説なの。末造は其中で高利貸しをやっていて、女房に妾、今で言うと愛人になるかな、その存在を詰問される場面があるんだけど、持ち前の気転から出た嘘で、見事に切り抜けちゃうんだ」

今の俺のように。

そう達也は頭で付け足した。

「小説を読んでもね、段々心の機微がわかってくるんだよ。例えば唇が妙に乾いていて、相手と視線を合わそうとしないのに、何故か一見は平静、話のボロが出てても完璧過ぎるほどに受け流す。普通の人なら無意識の言い損ないをした時点で、大なり小なり驚くでしょ？ それを平然と切り返せるのは、その人の平静が作られたものって証拠、どんな動揺も見せたくないとき、人はそういう行動をとっちゃうの。相手に知られたくない……何かが、あるから」

思わずつり革を握り締めた。

だが達也も学習能力という言葉を忘れたわけではない、それどころか常日頃から“能力”と名のつく単語で、脳内が埋没寸前な人間である。動揺、安堵、動揺、そしてまた……と、心かき乱されたその数知れず、今の状況も一種のデジャブなのだと処理、認識する時間はほぼ皆無だった。故に、またその安堵を待ちさえすればいいだ

けのことでもあったのだが、達也の内なるものは、不動を蹴った。

「それ当たりだよ、一条さん」

横目を送る一条。だが達也は気づかない。

「そのプリント整理してたとき、偶然順位表見つけてさ、前のやつ。そのとき一条さんが文系だってわかったんだ。文系の一位、言うまでもなく驚いたよ。じゃあなんでこれを口にせず、隠そうとしていたか？ 一条さんと同じだからだよ、俺も」

トップに立つ人間は常に賛美されて、一見輝かしい地位に思える。しかしその周りへの輝きが、蒔き覚えのない劣等感の種を育て、やがて嫉妬の花となりその人間を囲むことも常だ。そこで強いられるのは、闇を学びながら光の中で生きること。

「よく言えば嬉しい、でも別の言い方だと優越感に浸ってたんだ、最初のほうは。周りなんてよく見えてなかったから、なんであんなよそよそしい態度とるんだろうって思ってたんだけど……、嫌でもわかっていったよ。これがトップに立つことなんだあって。それから是一位って口に出すのも出されるのも、嫌悪感抱くようになってさ。だから一条さんのときも触れなかったんだ。でもそれで、返って一条さん怒らせちゃったんなら……」

微笑の一条。

「なんてね」

達也が首を向ける。狐につままれた様な顔だ。

そして当の本人は目を下にして、いつ取り出したかも知れぬメモ帳の上で、何やらペンを走らせていた。この電車が揺れる中、何一つの支えもなしで。

「ちよっと、イジメちゃったかな。でも西崎君、あたしを傷つけないようになしてくれてたんだね」

怒号の感情が、血流を加速させる。

しかしそれが脳の思考回路をも活発にし、一瞬の憶測から悪の閃きを呼んだ。達也は心の冷笑を隠しつつ、

「え、嘘……ってこと？ 今までの」

「全部じゃないけど、なんで文系のこと知ってるのかなって思ったから。だけど、これであたしのこと、一つ知られちゃった」

ふいに一条がペンを止める。

そしてビツと取ったその紙面に見えたのは、ローマ字の羅列らしきもの。

これ持ってみて、という一条の声で思わず手にしてみると、ローマ字の羅列はhttpから始まっていた。

達也の目が細まる。

一条のほうを見る前に、ポケットの凹凸を小突かれていることに気づいた。凹凸の正体、それは外からはわかりにくいはずの、携帯電話。

達也は尚更一条を見るも、その一条はやはりぼんやりとした両眼の顔を、小さく横へ傾けただけだった。

（まあ、学校で携帯は開けねえしな）

手馴れた動作で、サイトアドレスを入力していく達也。その最中に一条が、ねえ西崎君、と声を掛けた。

「そこで、わたしのこと何かわかるかもしれないし、何もわからないかもしれない」

「なにそれ、なぜなぞ？」

「西崎君はあたしのこと、どこまで知りたい？」

入力し終え、ページを開く前によく達也が顔を向けた。
いない。

辺りを見渡すとわずかに乗客が減っていて、停車中であることがすぐわかった。まさに自分が降りようとしていた駅で。

（んだ、あいつ……。だが、まあいい）

紙切れをぐしゃっと丸め、それを投げ捨てて電車を降りる。もう一度携帯の画面に目を落とすと、とつくに“そのページ”は開いていた。

「……闇、小説？」

MOVE 3 「接触」(後書き)

どうも、一文字 誠です。

やっと本題の「闇小説」出すことができました(最後のほうだけですけど)

でもまとめ方下手で文字数がだいぶ多くなりました。申し訳ないです。

あと、前期試験が近いので更新のほうは滞るかと思いますが、何卒ご理解のほどを(＞＜)ではまた!

MOVE 4 「小なる説」

その夜、達也はある確信に笑みを誘われた。

朝の電車で一条が残したあの言葉、そして手渡した“闇小説”。

「……間違いない」

自室のパソコンに電源を入れる達也。

ディスプレイの光源を映す瞳は細められ、今の心情を代弁するかのようにキーボードの音が連なった。

——あの女、俺に惚れてやがる——

はたから見れば、思春期の妄想に飲まれた愚かな者、と思うだろう。達也もその生粋からいけば、まずあり得ない言動だった、彼の確証がなければ。

『西崎君はあたしのこと、どこまで知りたい？』

女という生き物は、好意の対象となる異性とさらに親密になるため、あるものを共有したがる。それが服だとかマグカップなどの類なら、達也は聞くまでもない話で片付けているところだが、脳裏のものは廃棄寸前の資料室に、その“データ”はあった。女がその異性との間で欲して止まないもの、それはその異性との——

「その異性とだけの——秘密」

タンツ、とキーを弾く。

ディスプレイから、やがて眼球を介して脳へと伝達された情報が、確かに結びついた。携帯で見たときとはわずかに違うあのページ、闇小説と。

つまり、達也の解釈はこうである。

一条は、理由はわからないが、自分に惚れている。そして己が本能に従うまま、何か自分との秘密を共有しようと、この闇小説を持ちかけた。

『そこで、わたしのこと何かわかるかもしれないし、何もわからないかもしれない』

達也にとって、これ以上とない確信だった。

ならば話は早く、後は電車のときの閃きを実現するだけである。

この闇小説を足掛りに一条の、達也自身のカンニングに相当する秘密を手に入れることができれば、この世に恐れるものなど皆無、さらに一条の顔をもってすれば、文理不問で教師の評価をも牛耳ることが出来るかもしれない。

震えるように笑う達也。

「……かも？ いや、やってやる」

今はまだ見えないが、自分の手には鎖があった。一条の首へ巻かれた恋心という名の首輪に繋がる、錆びず切れず絡まらずの、鎖が。

そしてあたかもそれをもてあそぶ様に、達也はしばらく左手をぐにやぐにやと泳がせていた。泳がせていたが、天寿の灯火が燃え尽きていく蜘蛛の如く、指の動きは息絶えていった。

(なんだってんだ……こいつは)

苛立つ眼が見据える先は、PCで初めて気づいた、闇小説のあらすじ。

——それに目を通し終えたとき、ある者は火を奪われ、ある者は時の橋を渡り、ある者は名画を手にした——

書かれていたのは、ただこの一文のみ。

そこで先程は拾い読みで本文へ目を通してみたが、どういうことか、あらずじと結びつきそうなキーワードはおろか、題名を置き去って小説の二文字すら出てこない。

達也は一度自分の読解力を疑った。

しかし相手が小説とはいえ、読解力は文理関係なく、証明問題から穴埋め問題に至るまで必要とされるスキル、己がその備えを欠いている訳がない。だとすれば結論は、一つ。

——あらすじと本文が完全に異なっている、別作品と言っているように——

ならば何のためのあらすじか、こんな疑問が出てくるが、変化が付き物の世の中、逆にそれが流行っている、という見方もできないではない。例えそれが物書きを知らぬ者の目へ、異形に映っても。

掲載話数3。

作者名、イスミ旅団。

総合評価235／300pt。

結局得られた情報らしい情報はこれぐらいだった。わかりやすく言うと、闇小説についてほとんど何もわからなかったのである。

マウスがギリッと音を立てた。

こちらが思い描いていた通りに、何も進まぬままから足止めを食う。達也がこの世で最も嫌いで、憎くて、頭骨が見えるまで髪を掻きむしりたくなる衝動に駆られるほど、感情的になる厄介事だった。このままでは一条の飼ひ慣らしも、セン公どもの評価も、果てはカンニングがばれたときの保険も——

達也がコードを抜き投げた。

壁で玉砕のマウス。

金属音と共に散り落ちるそれを背に、達也は両肩を大きく上下させていた。目は鬼のように血走り、張り裂けんばかりに血管を浮き立たせた右手は、力の限りキーボード周辺を押さえつけている。

「ばれてたまるか……。あれが、あれがばれて……」

喘ぎ喘ぎ、達也が小声で何度も繰り返す。

知るは天国、知らぬは地獄。何としてでも、この闇小説から情報を得なければ、際限の見えないタイムアウトに食われる。

しかしそこでハッとした。

もし一条が、達也のカンニングを本当に見抜いていれば、

（共有する秘密を闇小説になんかにしねえで、俺のカンニングを

それに使うはず……。そうすれば今の逆で、万事に渡って主導権を握るのは)

一条。

カンニングの露見を引き合いにされれば、達也には何一つ抗う術はない。だが、一条はそうしなかった。いやできなかったのだとすれば……。

ようやく達也が我に振り返り画面に顔を戻すと、さっきマウスを投げた拍子にスクロールを下げたのか、ページが一番下まで行ってしまった。そこから目に飛び込んできたのは、“小説家になろうTOPへ”というクリック項目。

「……小説家になろう？」

とっさにキーボードへ指を並べた。

(まさか、んな見落としてたつてのか)

闇小説ばかりに気をとられて、携帯で見たときも下の方は見ようとさえしなかった。一条から手渡されたのは、この闇小説のページ“のみ”と思っていたから。

ページが移り変わるとき、そのとき妙に、目の瞬きを連想した。

緑に着色された“小説家になろう”の文字。

投稿、作者ページ、出版、NEWS、小説を読む、公式ブログ、協賛サイト、質問板、アクセス数、小説ランキング……。スクロールを動かすまでもなく、様々な単語がページで踊っていた。

下へ下へと見ていくと、“最近、完結された連載小説”、“最近、掲載された短編小説”、“最近、連載を開始した……”など、更新スピードはわからないが、一万を超える小説がそれなりに種類分けされているらしい。

(隔週か隔月か知らんが“最近、更新した連載小説”ってのが一番多いな……。70は超えてやがる。そして作者名の最後には先生……、やはりそういうサイトか、ここは)

その種類分けがさらにジャンル別に、読了時間別に細分化していることも、代わる代わるながらこの70作品あまりの更新速度は毎

日ということも、このときの達也には知る由がなかった。

しかしそんなものを知ったところで、今の達也の高揚には勝るはずもない。

さあて、の一声と同時にキャスターのイスを一度軋ませ、悪意の命を受けた十指は、ただ達也を導いた。

あるページへと。

一夜明け、二日、三日……と進んでいく日付。

気がつけば、明日はもうテストというところまで来ていた。あの奇妙な二日間以来、一条の後ろ姿さえ見ていない。

小説家になろうへ訪れた後、達也は闇小説のことを探るため、ネット上において意見投稿の場となる掲示板の存在を探した。皆までわからずとも、何かしらの手がかりは、得られるはず——そんな考えのもと、“質問板”というものを見つけ出した。

だが、闇小説はまたも達也を拒絶する。

——投稿してダメな例　小説の内容に関する相談

しかも違反者にはアクセス禁止処分になり得る罰則付き、力押しはできない。

(……こいつだけでなく、サイトまでこの俺をつ)

と再噴火するかに見えたボルテージは、途中で止まった。文に続きがある。

解決策…交流サイトの掲示板をご利用ください——

“交流サイトの掲示板”が青字に変えられており、どうやらそこから別のページへ行ける仕組みになっているらしい。サイトを移っちまうのか、と一瞬抵抗を感じた達也だが、他に頼れそうな道があるわけでもないため、前進を選択した。

交流サイトは、1つではなかった。

『小さじ一杯』

『小説家になろう〜秘密基地〜』

『お喋り広場』

目的を果たす上で有効的な選択肢が数あるということは、それだけで安堵感を人に与える。ましてや今回、時間制限もない。そう、一条は達也のカンニングを全く知らない。だから、達也のカンニングを秘密の対象にできなかったのだ。

冷笑とともに、独り言が漏れる。

「楽しく行こうぜ。闇小説……」

自分の揺ぎ無い未来のために。

しかし達也はここから先、今日に至るまで一切手をつけられなかった。流石に現実の時間までは無限という訳にいかず、テストというタイム・アップがある。優越感に浸れるほど成績がいいのなら、勉強の必要性が問われるところだが、過去にそれで達也は、簡単なはずの解法を本番でド忘れするという冷や汗な経験をしている。そのときは持ち前の直感と併せて、何とか基本的な公式から無理矢理解けたのだが、そのときから、達也はテスト前も勉強するようになった。

そして。

さらに日数は経ち、最終日のHRを迎えた。

「えー、それじゃあ以上この時間で期末試験は終了です。寄り道せず、早く帰宅するようにー」

やっと終わった、帰りにカラオケでも、ゲーセンでも、教室から担任が出て行くや否や、そんな声が机やイスやらの、ガタガタと立っている音に混じる。しかし何人かは答案の解法を確かめ合い、教科書とにらみ合いをする者も見受けられた。勿論学生として模範これ以上ない光景だが、達也はこれをどこか冷めた目で直視していた。

「なな、西崎西崎。ここの答えこれで合ってるよな？」

「ん？」

どこそこであの定理を使って、この公式に代入した後、単位換算を……。桜木はたどたどしくも自分の解法を説明している。そんな姿でさえも、達也の瞳にはゆがんで映っているなど知らずに。

「……あ、わりい。そこ俺なんて書いたか……。でも自信もっていけよ、徹夜だって結構したんだろ？」

達也が桜木の肩を軽く叩く。すると桜木もそれを笑みで返すのだった。

「いやそりやもう。斉藤とタケシも誘って無茶苦茶勉強しまくったんだぜ」

「三人揃えば文殊の知恵ってやつか？ んじゃ結果が楽しみだな」
達也が席を立ち上がるその、ときだった。

『えー、2－Bの西崎達也君、2－Bの西崎達也君。至急2Fパソ
コンルームに来なさい。2－Bの西崎達也君、2－Bの――』

「……俺が呼び出して、一体何の」

まさか。

教室中の視線が達也を串刺す中、青年はそれ以上口を動かすことが、できなかった。

MOVE 4 「小なる説」 (後書き)

やっと前記試験が終わりました。

大分間が空いてしまって申し訳ありません。そして、ウメ研究所様とそれぞれの交流サイト管理人様方には、本作品への出演を許可してもらいありがとうございました！ 夏バテに負けぬよう書いていきます。では！

MOVE 5 「契約」

廊下では、下校せんと生徒の群衆がゆらゆらうごめいていた。

その中を達也が、やはり倦怠感を顔へにじませながら、その隙間を肩で探すように先へ向かう。制服と制服がこすれ、時には足を踏みつ踏まれつ、嗅ぎたくもない他人の匂いがズケズケと鼻に入ってくる。こんな時、達也は決まって祭り好きな人々を軽蔑し、閉所恐怖症の人々に親近感を抱くのだった。

パソコンルームが近づくにつれ生徒を見なくなっていく。学校がある程度投資しているにもかかわらず、利用者がそれほど少ないという学校経営者の失策に達也は不甲斐なさを感じる一方、ホッと胸を撫で下ろす自分もいた。

（ああいうやつらは、いたらいたらで足が止まった。）

——パソコンルーム

外見では、他の学生に悟られまいとポーカーフェイスを演じていても、精神面はすでに、ガタガタであった。

カンニングというのは、警察の逮捕劇同様に大部分が現行犯で御用とする。そのときなら、証拠もある、言い逃れもされない、つまり絶対に捕らえられるのだ。そこを校内放送で呼び出した、とだけ聞けば安心できたが、この放送した声の主が厄介となった。

岩倉正造、この学校における生活指導の最高責任者。

通称セイシのここからお呼びがかかるときは模範生としての賞罰、二つに一つ。しかし達也が留めている限りの記憶では、どちらともに覚えがない。少なくとも、あの行い以外では。

達也は手を伸ばし、しかし拳を作って、また下ろした。

スライド式のガラス一つ張っていない扉は、室内の情報を完全にシャットアウトしていて、物音ひとつ漏らしてくれない。

代わりに階段から何かが聞こえた。

足音だ。

ああ、と頭を掻き篋り、急ぎ立てられるがまま逃げるまま、扉へ手が掛かった。

「失礼します！ 2－Bの西崎達也」

今来ました。と続くはずの声が途切れる。

室内は、真っ暗だった。

夏場の暑さがまとわり付かんばかりに漂い、PC機材独特のニオイが鼻をつんと突く。とても中に誰かいるとも、いたとも思えず、ただ扉から広がる光ばかりが、達也のシルエットを作り出していた。
(……いない？ 何だよそれ)

怪訝な顔で壁をなぞるも、スイッチが見つからない。

大抵それは入り口近くにあるものだが、手に触れるのは凹凸ゼロ、隙間ゼロの板のみ。ただ奥へ奥への歩数だけが増える。

途中になってくると、今度はコードやら何やらに足を取られそうになったり、出しゃばなしのキャスターのイスに体をぶつける事もあった。それでもスイッチは見つからず、段々自分が、何をしているのかわからなくなってきたとき。

足が照らされた。電光に。

「電気？」

顔を向ける達也。

何と、奥のパソコンが一台、起動している。

(いつの間に……いや、どうせどっかのボケがこいつを消し忘れた上に)

横目で扉を見ると、溜息が漏れた。

無駄な苦労をさせられた、と。

ディスプレイ画面はなぜ気づかなかったのかと思えるほどに明るく、それゆえ、足をけつつまずきそうな物の位置が大体把握できた。ここにいた誰かは、一体何を見ていたのか。

不意にそんなことを思った。

覗きの趣味はない達也だが、見られて困るものを消し忘れる者がいるだろうか。これも鍵を閉め忘れたことへの、その者が受けるべき裁きなのだと、そのとき妙に宗教じみた空想に背中押された。

そして影を踏むように、後ろから迫りくる殺人鬼のように達也が歩み寄っていく。まず脚が照らされる、次いで腹部から肩へと上っていった電光は、最後に達也の顔を包み込んだ。

驚きの双眼。

「これ!？」

カチッ。

声に応えたかの如くその音は短く響き、室内の電気がついた。顔を上げるも目を開けられない、暗闇に慣れかけていた目にいきなり大量の光を浴びせたためである。とは言えそれも寸刻同然の話で、一瞬間の苦痛に耐えると直に視力は戻った。

「残念、スイッチはココでした」

恐らくは姿形を見るまでもなく、声を聞いただけでわかっていただろう。

目の前には、手中に収めれば、己が願望を果たす上で好都合な道具になりうる者がいたのだから。

一条弥生という、獲物が。

「ああ、ありがとう。見つからなくて困ってたんだ。でも何で、一条さんがここに？」

目の前のそれを取り逃がさぬよう、自然と表情が和らいだ。

「待ち合わせしたの」

そう言いながら、扉を閉めることなく一条は無音で中へ入り、無音でイスに腰掛けた。達也との間合い、PCを並べている横長の机一つ分。だがあの日の距離とは、意味がまったく違っていた。

「2-Bの、西崎達也って人と」

あの目で微笑む。

初めて出会ったときも、確かに一条はこんな人間だった。しかし今は――

「つてことは一条さん、校内放送聞いてたんだよね？ 俺、身に覚えはないんだけど、なんかセイシの」

「岩倉先生なら来ないよ」

えっ、という顔になる達也。

一条の微笑へ、わずかに影がかかった。

「あの放送は、あたしが先生に頼んだものなの。西崎君と二人きりにしてくださいってね」

どうやらこれが現実のようで、いくら生活指導のお偉いさんでも、偏差値一つで君主にも奴隷にもなるらしい。それで人間性まで信用したのだから、見る目も疑いたくなる。

だが今回、それのお蔭で一条という道具の威力を測ることができた。使いようによっては、名に弱い日本人の特性故に、女に弱い男が男尊女卑の古臭い椅子で踏ん返り返っているが故に、学校そのものまで牛耳れるかもしれない。そして当の本人も、今こうして歩み寄りを見せている。

勝った。

その興奮をあくまで隠しつつ、達也は安心した口振りを演じた。

「ほ、ほんとに……？ いや、放送聞いたときはすごい動揺して、訳わかんないままここへ来ちゃったんだけど、取り越し苦労だったよ、はは。本当にありがとう。……でもさ、なんで俺と……二人きりに？」

すでにレールは引いてやった。後は振り回されるがまま、俺を乗せていけ。

そんなことが心で渦巻いていることなど、表情、口調からは到底読み取られない。達也にとってこの上ない自画自賛に値する、完璧な演技だった。

一条が椅子を回して、体を横へ向ける。

「だって、他の人に聞かれたら困るでしょ？ あたしが――」

――西崎君のカンニングを知ってるってこと――

心臓が異常収縮した。

脳が麻痺する、顔が麻痺する、手足が麻痺する、全ての感覚が活動を停止するなか、背中だけはグシヨグシヨに湿っていく。

馬鹿な。そう何度も心で叫んだ。

「……へ？ カ、カンニング？ ははっ、じよ、冗談きつ」

「江戸中期の1772年、側用人から初めて老中になったとされる人……誰だったっけ？」

日本史。

しかもテストに出ていた問題だ。

（ここから質問攻めにして……俺本人からカンニングを露呈させる気か）

テストは今日やった。それ故に忘れたなんて台詞は吐けない。

震えを隠さんとポケットに右手を突っ込み、達也は頭を垂れた。

「……タヌマ、オキツグ」

一瞬瞼を上げる一条。

達也の答えは、正解だった。

それが証拠に、達也は安心したような笑みを、しかし勝ち誇った笑みを見せている。そう、ポケットからいつ取り出したか知れぬ右手に、あのテープを巻いて。

（残念だったなあ、一条。俺はテスト後、いつもこいつを回収してるんだよ）

しかも問題文と同化するほどのステルス性を持っているため、机一つ分も距離があれば一条からはまず視界外。そして生まれつきの好視力を有す達也にとっては、悩む振りをして頭を下げれば十分に読み取れた。

「……じゃあ、その漢字は？」

無駄な足掻きを。

頭を垂れ、達也はわざと悩ましげに、

「えっと……タヌマは田んぼの“田”と沼地の“沼”で、オキは注

意の“意”で、ツグは後継者の“継”だったかな」

と言った。

「不正解」

一条の声が室内に冷たく、響く。

そして捕らえたとはかりに振り向き、立ち上がった。

「ツグの漢字はね、それじゃなくて次回の“次”って書くんだよ」

「えっ……？ あ、ああ。そうだったね。うっかり忘れてたよ。は……。でも、これでカンニングしたって言うのはちょっと」

「他にもあるよ、そういう間違い。だって、西崎君がカンニングに使ったテープ、あたしが摩り替えたんだもん。誤答を散らばらせた物と」

達也の苦笑が掻き消された。

思わず右手を隠すように声を上げる。

「だからカンニングなんて！ それにっ、テープだってなんのことか」

「じゃあそれ、岩倉先生に言えるかな？ 作るの、大変だったんだよ。だから自分がどこを誤答に摩り替えたのか覚えてるの。……ちやんと、わかるよ。テストが返却されたとき、西崎君が間違えたところとテープの誤答が、一致しているか、どうか」

達也は声を出せなかった。

揺れる瞳には一条が映っている。初めて会った日から、何一つ変わらぬ笑みで。

しばらく、一条から顔を動かさなかった達也だが、やがて枯れゆく花のように頭を、下ろした。

「言ったところで……どこに証拠がある」

再び上げた達也の顔からは、完全に仮面が剥がれていた。西崎達也と言う人間の本性が、初めて人前に現れた瞬間だった。

「カンニングを見抜いたのは褒めてやるぜ、一条。だがな、いつやったか知らんが俺のテープを書き換え摩り替えた以上、お前も同罪を疑われるぞ？ 知っていたんだからなあ、セロハンテープへの転

写方法を！それに学校側も本当に俺を処分するかどうか……、なんせ俺は理系のトップだ。進学実績を取るか道德観念を取るか、今の社会が答えてくれるさ」

「もう、“一条さん”じゃないんだ」

と、ふらり歩み寄って来た一条は達也に、抱きついた。

「なっ!？」

突然、一条が取った行動に達也は度肝を抜かれた。

自分の首に絡められた腕も、自分の胸にうずめた頭から覗く首筋も、皆透き通るような色白さ。そして男にはまず無縁な香水の匂いが、鼻腔を緩やかに撫でていく。ところが今にも壊れそうなその小さな肩は、わずかに震えていた。一条の涙声とともに。

「あたしっ……、ただ見ちゃっただけで、それだけで脅されて……すぐく恐くて、何も言い出せなかったんです。毎日毎日、そのとき睨みつけられた目が、頭から離れなくて。……でも」

最初は一条が何を言っているのかさえわからず、到底その狙いなど知る由もなかった。しかし、妙に使った丁寧語には、言いようない恐怖を包み隠していた。

「こんなのダメだって、言わなくちゃダメだって……わかったから、……あたし勇気を出して言います」

そしてこの後あたしが——と、顔を上げる一条。

達也の背が凍てついた。

一条の顔には涙など一滴もなく、むしろ笑みを、闇に包まれた笑みを、吐息がかかり合うほどの眼前で見せている。

「“西崎”が巧妙な手でカンニングをしていました、って涙顔で岩倉先生に言えばどうなっちゃうかな。今の社会が……答えてくれるんだよね？」

偶然の目撃者を装い、かつ脅されていたと一条が涙ながらに言え

達也が振り払う。

ベリッ、と同時に音がした。

「証拠って……こういうのを言うんだよね？」

押し遠ざけられたにも関わらず、一条は髪も乱さず直立の体勢を保っていた。その手に、あのテープを垂らして。

右手を見る、しかし遅かった。

（気づいて……いやがったのか！？ くそっ）

「誤答が一致している上に、指紋まで一致していたら……もう、知らないって言えないんじゃないかな」

そして岩倉にその立派な証拠品を献上すれば、思うだけで頭の中が真っ白になった。十年二十年先の未来ではなく、明日の未来がわからないという不安、それだけで途端に死の恐怖へ移り変わった。

玉の汗が噴き出た顔、ボサボサに乱れた髪形、字も書けぬであろう震える手、しかし奥歯はガチッと閉め、その目だけはまだ逃げ道を追っていた。

「……金か？」

もはや懇願にも近い声が出た。

今の達也の脳で浮かぶのは、取引の二文字のみ。それは理性が、ではなく本能が引っ張ってきたようなものだった。

「俺のカンニングをバラしたところで……お前には何の損得もない。何かを望んだからこそ、俺をはめた。そうだろ！？」

「……うん。多分そう」

それを聞いて達也は目を細めた。

一条が一呼吸置き、互いの聴覚への刺激がゼロになった頃、その一言が出た。

「闇小説をぶっ潰して……完結するまでに」

MOVE 6 「発現」

言葉を忘れたかのように、達也は返事が一瞬遅れた。

「……潰せって、こいつは……」

と、先程自分を奥へ導いた、PCに目を移す。そう、達也がその画面で見たものは、“闇小説”のページ。

構造の都合上、この室内は死角となる位置にスイッチを備えている。それを利用して達也と距離を置き、かつ逃げ道を塞ぎながら奥へ誘導した後、電車で手渡したサイトページに、足を運んだかの確認ができるここまでの細工、全一条によるものだった。

「こいつは……、物とかそんなじゃねえだろ」

「だからできません、別のお願いをしてください」

一条の声が達也の視線を戻す。

「そう言おうと、してたの？」

無音の歯軋りを隠しつつ、達也は顔になんら変化を示さぬまま、一条を黙視し続けた。だが一条はそれを逆に楽しむよう、

「いいよ、別にあたしは。次の“道具”を……探すだけだから」

女友達との談笑さながらの顔で、声で、達也のカンニング露呈をちらつかせる。どうやらここまで手間をかけたにも関わらず、従順の道から外れるだけで使い捨てる覚悟を持っているようだった。

「想像で人の意思を決めるな。俺が言ってるのは、“潰す”の内容を具体的に示せってことだ」

「やる必要はないよ。闇小説が物じゃないって、わかってるなら……」

達也の脳が反応した。

——コンピュータウイルス——

そして全開の両眼。

「まさか、あのサイトごとか!？」

「……そうなる、かな。一番早い方法でいくと」

確かに小説家になろうをウィルス感染させれば、その一部に過ぎない闇小説など簡単に消し飛ぶだろう、全小説ごと。しかし達也が見た限りでは、あのサイトには協賛サイトも数多くついていて、かつアクセス数も膨大な数値を叩き出している。もし二次感染、三次感染とウィルスが広がれば……。

「……無理だ。確実に警察が動く」

ところが一条はいつもの微笑みを止めない。

「そうだね。確実に……西崎君は捕まっちゃうだろうね」

キーボード強打の達也。

「ふざけんなっ! 俺の身を売る気はないと言っときながら、闇小説をぶっ潰すぶっ潰さないに関わらず、道先を消すような真似しやがって。俺をどうするつもりだ!」

その罵声は、あわよくば野次馬を招き入れんばかりのものだった。罵声など恐らくこのとき初めて、達也が人前で出した声だっただろう。ところが、言うよりやはりここでも、一条は動じることなく返答した。

「“一番早い方法”でいくから、そうなっちゃうんだよ。だから西崎君には、芥川直樹、吟憂詩人、M A S A M U N E、殺人狂、漆黒のロンギヌス、奇ダン爵、鮫島不二夫、岩帽子……まず、この人達について、知ってもらう必要があるの」

(……第二の、方法ってやつか)

だがどうも乗り気になれない。達也の目には、依然疑心の色が消えないままだった。

「で、そいつらが何なんだ」

「その人達はね、さっきの名前順に文学、恋愛、歴史、推理、ファンタジー、ホラー、SF、コメディでランキング一位にいる、作家達」

小説家になろうでは、投稿された小説に対する読者の評価・感想

が数値化される。さきほどの8分野にファンフィクション、その他を加えた全10分野が設けられ、その各々で数値順にランキングが存在するが、その一位は10人とは限らず、2分野3分野で同一作者が一位になることも事実上は可能となる。

（確かに……何人かの名前は見たことがあったな。あのときに）

「ファンフィクションとその他の一位は、その中の誰かか？」

「違うよ、でも今は関係ないの。その人達は“イスミ旅団”じゃないから」

イスミ旅団。

その単語はすぐさま別の単語に結びついた。

「さっき言った8人……そいつらが書いているんだな、闇小説を」

「そう。あとは、サイト単位では無理でも作家単位なら……ってことかな」

冷笑を影に、背を向ける一条。

「おい、帰るのか」

——まだだよ。

と、扉で一条が止まった。そして半顔を達也に見せ、

「見張り、何かと面倒でしょ。……基地へ行つて。そこに見てほしいものがあるの」

と視線で起動中のPCを指した。

（基地……？ ああ）

達也はイスへ腰掛けたが、決して快くそうにはせず、一条を一瞥するやいなや、後はディスプレイから全く顔を動かさなくなった。

カタカタと連なるキーボードの快音とは裏腹に、達也の中で渦巻くやり場のない憤り。それは今こうして一条の手駒と化している、自分自身だった。

達也は指を止めることなく、

（今は従うしかない……。だが一条、いつか俺さえ凌ぐほどの闇を引きずり出して、お前に今日以上の屈辱を味わわせてやる）

そのページに移動した、『小説家になろう〜秘密基地〜』へと。

——ココは小説投稿型サイト・「小説家になろう」公認の交流サイトです！！ 管理は、快丈風（W0739A）と伊之口浩作（W1240A）の共同で行います——

快丈風、伊之口浩作。名前の後ろを見る限り、やはり小説家になろうの作者らしい。ところで交流サイトと言えば、達也があの日踏み入らずじまいになった、3つの内のひとつ。

達也がスクロールを上下させる。

（ここで見ろってことは、掲示板か……いや、チャット）

「イラスト集ってところ」

マウスの手が止まった。

しかし代わりに動かしした眼には、一条の後ろ姿。

「いつわかった。俺のページ移動したときが」

「なんとなく、今かなって。ところで、そのサイトで描かれてるイラストはね……」

達也は聴覚を捨てた。

このとき彼は無意識のうちに一条の命令から抗おうと、言われる前にそのイラスト集から、何か見つけ出してやろうとしていたのかもしれない。が、それは避けられない死闘との、絶対値減少を速めたに過ぎなかった。

（物書きがいるなら、絵描きもいるってか。まあネットなら、良くも悪くも人間が集まるからな）

様づけされた名前を眺めながら、次の10件、次の10件と項目を流していく達也。その目が追うたび、その指が動くたび、その画面が移るたび、何かが確実に目覚めつつあった。そして、“その名”が過ぎたとき——

達也が左眼を押さえた。激痛によって。

「うっ！？」

いや、激痛と形容し切れる痛みではない。まるで眼の中に、何百

匹も蛆虫を入れられ、食い散らかされていくような痛み。

首筋から血管が浮き出る、爪を割らんばかりにキーボードを掻く、女のように叫ぶ。収拾がつかない事態とはこのことか、痛みを取り除くためならば、

「殺せ！ 誰でもいい！ 俺を今すぐぶっ殺せええ！！」

そう思い始めたとき――

痛みはふっと、消えた。

手も足も、頭もすべてイスから垂れ下がり、肩で不規則に呼吸する達也。その目は虚ろだったが、命の火は、まだ残っていることを示していた。

（なん……だってんだ。……今、のは）

しばらくは、生きていることさえ断定できなかった。しかし、やがてゆっくり体を起こすと、画面とは別方向へ目が向いた。

「やっぱ……女か」

一条は消え失せていた。

扉が閉まっているのを見ると、差し詰め達也の異変に恐怖し、ここを飛び出したといったところだろう。自分を置き去りにしたことへの責め、それはなかった。むしろ扉を閉めてくれたおかげで、こちらの絶叫を外部へ漏らさずに済んだので、感謝しているほどである。

（取り乱した……ってことは、先公を呼ぶなんて考えられずに帰ったな。まあ、常人ならそうするか）

と、再び画面へ目を戻す。

横顔の一条。

達也は飛び上がった。

「な、何やってんだお前！？」

「だって、西崎君あたしの説明聞かないし、いきなり苦しみ出すしで、全然、言う通りにしてくれないんだもん。でも」

一条は常人ではなかった。

どうやらあの達也を見ても大して動じず、そのまま終始傍観して

いたらしい。しかも扉を閉めるといった配慮までして。

（こいつ、どんな顔して見てやがったんだ。いや、それよりいつの間に……）

「西崎君、どうしてこの描き手さんを選んだの？」

「……選んだ？」

一条から画面へ。そこにあった描き手の名は——ジャガーノート

頭をめぐらせたが見覚えも、聞き覚えもない名前だった。だが一条は自分が、この者を選んだという。

「そりゃ多分、さっきなんかの拍子で、こいつをクリックしちまったんだろ」

「じゃあ、どうしてキーボードをあんなにしておきながら、画面がきれいなままなの？」

言葉が出なかった。

確かに痛みで苦しんでいる間の記憶、その全部はなかったが、キーボードを掻き舐めたのはわずかながらに覚えていた。ならばそれと、今の画面は結びつかない。

（一条が？　だがあの間の操作は不可能だ。今の奴の位置ならできるが、それは俺が不意を突かれた数秒間の話。それに俺はクリック音も、キーボード音も聞いちゃいない）

こいつじゃない。誰が——

「君だよ」

一条が両手で頬杖を突きながら、画面をぼんやりと見つめている。「確かにね、最初はむちゃくちゃにキーボードを叩いてたよ。でも、すぐにあの状態の中、右手だけちゃんと動いたの。キー1つ1つ、人離れした速さで押しながら」

達也があざけ気味に、

「じゃああれか、俺が我を失っているにも関わらず、右手が勝手に動いて何十人という絵描きから、このジャガーノートって奴を選んだ」

要約すると、一条が頷いた。

「後言っちゃうと、あたしが見てもらいたかったのも……この人の絵だったんだよ」

席を立つ達也。

そしてため息混じりに一条を見下ろした。

「じゃあまた、“一条さん”。俺帰るから」

そのとき、流石の一条でも感情を露にするかと思われたが、表情も視線も動かさぬまま、ただ人形のように一条は動きを示さなかった。

しかし達也が振り返り際、

——それに目を通し終えたとき、ある者は火を奪われ、ある者は時の橋を渡り、ある者は名画を手にした——

あのあらすじを、ゆっくりでもなく速くでもなく、一条が音にした。

「覚えてるかな、闇小説のあらすじ」

最初は足を留め、達也は一条の意図を察せずにはいたが、すぐに口を開いた。

「ああ覚えてるさ。今から、ほとんど殺すも同然な奴の……歌い文句ぐらいな」

「あたしね、思うの。あのあらすじは、小説中のことじゃなくて……闇小説を最後まで読みきった人へ、本当に起こることなんじゃないかって」

「……だといいな」

そして青年は部屋から去った。

今まで影と化していた真の左眼が、確かに目覚めたことも知らず。

MOVE 6 「発現」(後書き)

どうもお久しぶりです、一文字です。

部活の合宿やら試合やらで無茶苦茶更新遅れました。ホントすいません(汗)

後やっときさ闇小説の作家達も出し始められたので、おまけとして彼らが書く小説の、最大の特徴をお教えします。

文学……芥川直樹 『説話師』

恋愛……吟憂詩人 『悲愛』

歴史……MASAMUNE 『言語』

推理……殺人狂 『殺害描写』

ファンタジー……漆黒のロンギヌス 『台詞回し』

ホラー……奇ダン爵 『鍵小説』

SF……鮫島不二夫 『絶対データ』

コメディ……岩帽子 『風刺コメディ』

長くなりましたが、それではまた！

MOVE 7 「敵方、味方」

歩幅一定、かつ一步として音を外さず、等速度で歩く青年がいた。土曜の昼下がりで、娯楽に身を投じんと談笑する者達よりもわずかに速く、補助輪の自転車よりもわずかに遅く、西崎達也は一般の歩行者となんら変わらなかった。

蟻にたかられた蟬、歩数を重ねる度に身を過ぎていく影、頬を涼ませる微風。

景色はすでに夏の余命を告げていた。しかし今の達也には、それが羨ましく思えた。自分と違い、どんな形であれ、まだ希望があるということなのだから。

取引を持ち出されたとは言え、闇小説を破壊できる保証はどこにもない。

不快だった。

さっき気づいてしまったあることも加えて。

半歩速め、そのまま歩き続ける。しばらくして今度は半歩、遅らせる。ランダムにこの組み合わせを混ぜても、ほとんどの者はその変化に気づかない。よって知らず知らずの内に、達也と“その者”は歩調が揃うことになるのである。

（どこのどいつだ……、今日に限って）

それからその者は付かず、離れずのままだった。

下手に警戒の素振りを見せれば逃がしてしまうため、男なのか女なのかすらわからない。そう、達也は相手を捕らえる気でいた。

——次の角を右へ、そうすれば——

と、90度曲がって一時姿を消す。

それから十数秒後だった。その者の出現は。

「この先は行き止まりだぜ」

達也が胸倉を掴んだ。

そして壁へ。

ひい、と出した声にも気にかけず、威圧の眼差しへ映った相手の姿は、

「なんのつもりだ、このブタ野郎」

寝癖同然の髪を乗せ、重力に抗えぬ頬がぶら下がった顔には、ニキビ、そばかす。眼鏡から覗かせる目は細く、服のしわを伸ばす必要がない体をお持ちだった。

「ち、違う！　僕は何も……、ただ、ただ……」

その後何かボソボソと呟いたが、そんなものが興奮状態の人間へ聞こえるはずもなく、火に油を注ぐこととなった。

「違う！？」　ブタ野郎って言ったことか？　それとも俺がまだ、一言として発していない尾行のことか？」

襟の手が固くなる。

それに連動し、男の顔も紅潮していった。脂肪が厚い分だけ気道の確保も難しいのか、カサカサの唇をパクパクと動かしている。

こんな場面を誰かに見られれば、間違いなく達也はエリート街道から足を踏み外す訳だが、それは“同様に間違いなく”、起こりえないことだった。まず通学路からかなり脱線、かつここは民家一つないコンクリートの行き止まり、健全な一般市民からはスラム視もされるであろう場所である。

人目など皆無。誘導も完璧だった。

――ただ。

(……どう考えても、おかしい)

眉を構える達也。

そして頭で復唱した。自分はここへ来たことなど、一度もないと。(ない、似た場所すら頭に浮かばねえ。だがさっきは、たしかにここら一帯の地理を熟知していた)

何故自分は、今ここにすることができたのだろう。できぬ説明が冷水となって、背中を舐めるように流れていく。

何かがぬるりと手首に触れた。

突き飛ばされる体、刹那に消える視界、そして……ウドの太木が一本。

「……き、君が悪いんだぞ！ あんところで……僕の」

両手で上体を起こし、達也は片膝をついた。突き飛ばされた拍子に臀部、及び腰を強打したらしく、その顔は苦悶を漂わせている。

舌打ち際、

（考え事してる間に力が緩んだ？ なら差し詰め、あの感触はデブの汗まみれな手ってところか）

達也は相手を黙視した。しかしその目は、次の言葉で意味を変えた。

「君が、僕の一条さんと二人っきりでいるからだ！ それも抱き合っ
て！」

脳内が揺れた。

二人、抱き合っていた、一条……。その単語は間違いなく今日の前にいる者が、あの状況の目撃者であることを十分過ぎるほどに証明していた。達也のカンニングが露呈した、あの状況を。

ガリッと、コンクリートの床を掻いた。

「おい。お前そのときに……、何を聞いた」

眼球の血管が脈打つ。

その殺意の視界に、花岡大吾郎が己の姿を見たとき、蛇にらみにも似た金縛りを感じた。しかし無意識にあるものを探している自分には気づかなかった。それを手にすることの、意味さえも。

「き、消えちゃえ……、僕の一条さんを弄ぶ奴は……」

声とともに震える、鉄パイプの手。

バット並の長さに、先端には接合のためと思われるボルトねじが。すすのような黒ずみは、金属の冷感を生々しく表していた。

歩むまでもなく、すでに互いが互いの影を踏み合える距離、そして今の達也には防衛策も回避策もないばかりか、第三者による助けも期待できない。

が、達也の目は命乞いをしていなかった。

「俺を……殺したいか？」

その視線と、呼吸困難のように肩を上下させ、瞬きを微塵も見せない花岡との目が、確かに交差を見せた。

鉄パイプが振り上がる。

「だま、だ……っ、黙れええええええ！」

直撃の右腕。

くの字が、静止画として映った。

親指で内側から突いたような、皮膚の凹凸とともに。

「こんにちは」

「あら、一条さん。……こんにちは」

いつものように、スライド式の扉をスーッと開けて入ってきた一条に、佐々木奈美は黒い長髪を耳に掻き揚げて、腰掛けているキャスターのイスを向けた。

彼女は学校の人間だが、教師ではない。生徒の思春期における悩み、葛藤の相談に乗り、対話による治療を施す人間、つまり専属のカウンセラーである。だからこの部屋には、向き合いのソファアがあり、ホワイトボードがあり、ぬいぐるみがあり、そして何気ない私服の、彼女がいる。

佐々木は一条がソファアに腰掛け、やはりいつものように文庫本を読む様を見届けると、パソコンの手を再開した。

「やっと忙しいテストが終わったわね。今週はどうだった？」

「……勇者様の喉に剣をつき立てて、忠誠を誓ってもらいました」
佐々木が振り向く。

ところが本の表紙に目をやると、「ああ」と笑みを落とした。

「その本、どこまで読んだの？ すっかりハマっちゃってるじゃない」

「まだ最初の方なんです」

「じゃあ楽しみね」

と、佐々木はキャスターを戻した。

しかし一条は、そこから一度も本から目を離さず続け、

「でも、物語の結末はもうわかっちゃってるんです」

「話の展開が単調？」

「……すごく複雑です。でも、勇者様はあたしの願いを聞いてくれたから。どんなことをして でも、必ず最後に倒してくれるんです」

——闇の名を冠さず、そのモノを——

そう呟いた最後の言葉の意味は、佐々木の耳に届くはずもなかった。

MOVE 8 「掌握」

休みの前日はどこか安心感があり、精神的にも肉体的にも余裕を供給してくれる。例えば地下のプラットホームでも、その薄暗さが返って心地いいという気にさせ、忙殺の日々でさえあざけ笑わせる。今、地下を照らす光源とともに、機械の音源が遠ざかっていった。イスに腰掛ける人さえいない無人空間。そこで達也は、電車の振動を感じ取れなくなるまで待つかのように、微動だにせず、右手を見つめていた。

ぼんやりと。

しかしその頭の中では、記憶の断片が乱れ飛んでいた。

左眼の激痛、ひしゃげた鉄パイプ、右腕内部の溶けるような熱さ、そして――

――う、嘘だ。今、確かに折れっ――

地に伏す花岡。

達也が右手を握った。

「花岡、大吾郎……。使える」

冷酷の微笑を、その顔に飾しながら。

その頃、当の花岡は眼鏡の砂利を払いもせず、一足早く自宅に帰していた。いつものように入る自室は薄暗いものの、整理されずに散らばったDVDやら雑誌などには決して足を取られることなく、花岡はパソコンの前でキャスターの椅子を軋ませた。

ディスプレイの光が、彼の腫れた片頬と凝固しかかった血のつく唇を、うつすら照らし出す。手馴れた指の動きでパスワードを入力し一直線に向かった先は、小説家になろうの作品ページ。

題名『パラサイト・アイ』、そして作者は――奇ダン爵。

息を荒げながら、花岡がギョロギョロと両の眼で文字を追ってい

く。

「多分、いや絶対そうだ。だとすればあいつは……魔獣」
すうっと汗が流れる。

しばらく花岡は自分の腫れた頬をゆっくり撫でたり、唇の血が固まったかどうか確かめたりしていたが、おもむろにポケットから携帯を取り出した。

待ち受け画面には、体操服の一条。しかし被写体にしては目線が外れている。

にやあと、花岡が顔をほころばせた。

「でもいつか……。もうすぐさ、もうすぐで……。でへへっ」

テスト最終日、ギリギリで仕上げた提出課題を出しにいくため、花岡は職員室へ早足に向かっていた。しかし廊下という廊下が生徒で埋もれており、加えて自身が巨体ということもあってやむを得ず、人通りの少ないP C ルームまで回り道をした結果——偶然にも一条を目撃したのである。

ところが花岡は“どちらか”などと天秤にかけるまでもなく消極的な人間、当然嬉しさ半分、気恥ずかしさ半分の心理が招いた行動は、盗み聞きだった。そこでP C ルームにいる人間は他に男一人、どうも一条を罵倒していることがわかったので、嫌悪感から抽出された僅かな勇気が花岡を次なる行動、盗み見へ進ませた。

そのときに見たのが、二人の抱き合っている姿というわけである。度肝を抜かれた花岡は無論動揺し、見るや聞くなどといったところではなくったため、扉から離れ、達也のカンニングなど耳に入らぬまま頭の整理に追われていた。

「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！ 酷いよ一条さん、君は僕だけの」

そう涙目で、扉から死角の壁へゆっくりともたれかかる。

——まだだよ。

顔を上げる花岡。

そして僅かに口を開けたまま、ぎょろりと壁から覗き見た。

「……一条さん。でへへ」

舐めるような視線に映った一条は、ジャガーノートなる絵師を達也に探させている間、見張りについていたときのものである。さらにそのとき、一条は達也が聞かずにしまった『小説家になろう』秘密基地』の説明をしていたわけだが、これがP Cルームの防音障壁に阻まれることなく、花岡の耳に入った。

達也と同じく、闇小説ハンターの花岡の耳に。

（……イラスト集、9枚の絵、そして小説家になろう！）

両拳を作った。

（やった……、いやったあああ！！ 一条さん、やっぱり君と僕は繋がっていたよ。君も闇小説を追っていたんだね？）

「ひひひひ……、ひひひひひ！」

両断寸前だった花岡の一条に対する“奇愛”、それは今再び強固なものとなって、あとは達也に対する敵意だけが残った。その後一条が部屋に戻り、達也が先に出てきたので、これを花岡が尾行。あわよくば殺害などと頭に入れておきながら、返り討ちにあってしまったのである。

しかし、そのとき達也と花岡の間で、ある契約が交わされた。

「おっ」

と、携帯を閉じる花岡。

P Cの受信トレイに一通のメールが来ていた。

——俺だ。確認のためこのメールを見たら返信してくれ。この先のやり取りも異例な場合を除いて、こいつでいきたいと思っている——

「俺の、いや」

そのディスプレイから、ケーブル回線を介し巡りに巡って……同じくパソコンを前にメール文を読む、達也の姿があった。

「互いの望みが……叶うまでな」

達也が目細める。

神は手元から、偶然と称した幸運を落としたのだろうか。

花岡が確実に腕をへし折れると踏んだであろうパイプの一振り、

しかし達也の右手は今、指先まできれいに動いている。動揺した花岡は支離滅裂なことを言っていたが、どうやらカンニングのことは耳にしていなかった。

名前。

文系クラスの中の下。

闇チャット。

一条への好意。

この最後に発した言葉が、達也に花岡のマリオネット化へ歩ませた。

まず、一条は自分の恋人という前提で話を切る。ここへ校内ではそのことを内密にしていると言えば、人の気がない一室で抱き合っていたことが不自然でなくなる上、目撃者の花岡による秘密の露見を、暴行の理由にすることもできる。

当然このとき、花岡の中では達也への殺意が再燃していた。

だがこれこそが、達也の計算通りだった。

触れる前に女を取り上げられ、極度の興奮状態になった男へ、達也はこう言った。

——そう俺と彼女は恋人、の筈だったんだけどね。実は最近、口喧嘩が絶えないんだ。さっきだって……。今のところはすぐ仲直りするんだけど、自分でもわかるよ。後は捨てるか捨てられるか、ってね。だけど花岡、お前の言動で決心がついた。彼女をお前のモノにしてくれ、文字通りのな——

この手筈を踏むための準備期間中、一条を手元に留めさせなければならぬ。その鎖が、花岡から提供される闇小説の情報というわけである。

一見は対等、しかし操る者と操られる者の主従を誓ったに過ぎないこの儀式。そこにはさらに達也の目論見が潜んでいた。

——彼女をお前のモノにしてくれ、文字通りのな——

達也は花岡へ、いや野獣へそう告げた。

——いつか俺さえ凌ぐほどの闇を引きずり出して、お前に今日以上の屈辱を味わわせてやる——

達也は一条へ、いや生贄へそう告げた。

「ないなら……作ってやりやあいだけだったんだ。直にお前の身へ屈辱の烙印が押されるだろうよ」

両肩を震わす達也。

自室では、つけっ放しのテレビからニュースが流れている。どうやら強姦の容疑で、無職の男が逮捕されたようだった。

——彼女をお前のモノにしてくれ、文字通りのな——

達也はそう告げた。花岡へ、いや野獣へ。

MOVE 9 「超常現象」

潔白な白衣を風にあおられ、所々サイボーグ化された科学者。

丹塗りが剥げた円柱の門、そこで火の灯る金色の錫杖を立てながら、笠を目深に被る薄汚い法師。

耳元まで広がった口をにんまりさせながら、デコボコな鼠色の帽子を両手でガッシリ被る少年。

夜で包まれた荒野に深々と突き刺された槍から、引き剥がされる様にして出てくる人の形をしたもの。

10の尾を四方八方に広げる、白い狐。

三日月の光を片身に受け、シルエットを残しながら天を駆る竜。

全身をダランとさせた骸骨を優しく抱擁し、その口に接吻する美男子。

シルクハットを片手に、整った髭の口元をわずかに緩ませる紳士。
西洋人を彷彿とさせるブロンドの長髪を波打たしながら、落涙を空で躍らせる女性。

絵師、ジャガーノートが残した9枚の絵である。一枚一枚が各々、作者誰その何とか言う作品の登場人物を書いたものなのだが、なぜかその全ての目が明確に書かれていなかった。ある絵は被り物で、ある絵は影で、ある絵は描写すらされず。

そしてさらに、これらにはもうひとつの共通点があった。

——いずれの登場人物も、作品も、作者も、『小説家になろう』に存在しないこと——

（最初から……、もしくは絵を描かれた作者は、次々にサイトを脱会していく……か？ 呪われた絵師というなら随分なキャッチコ

ピーだがな)

達也が軽蔑の眼差しを向けた。

「……非科学な」

ここ数日、花岡とはコンタクトを取っていない。一条の恋人を演じている以上、毎日のようにパソコンでメールを返信しては怪しまれるからだ。だから達也が花岡へメールするときの文頭は、決まって「例によって一条が。昨日闇小説を見ていた一条が」などで始まる。

釣った獲物は大きく、花岡は何の躊躇もなく自分の知っていることをホイホイ吐いた。

まず本命の闇小説だが、旅団にいる作者達はそれぞれ、依然ランキングのトップに立つ作品を保持している。その作中の主人公達が、闇小説でも出ているのだという。

これは達也も薄々気づいていたのだが、問題はその本文にあった。少々の物書きならその不可能さが重々にわかるらしいが、どうやらこの作品は各話ごとにあるいは一文ごとという特定された範囲で、代わる代わる作者が書いていくリレー形式を完全に逸脱しているらしい。

あるときは一文ごとに。

ある時は文節ごとに。

ひどいものはその文節の中で、しかも不規則に作者がローテーションを繰り返すのだと。まるで作者達が一人に凝縮されたみたいだ、花岡はそんな例えを持ち出していた。

達也が、『全く異なった言語を話す八人の者に、哲学について議論させるようなものなのか』と返信すると、花岡は名比喻だと馬鹿みたいに賛美した。しかし文は続く。

『書き方十人十色ってな、情景描写も心理描写も作者の一視点だ。はつきり言って闇小説の書き方じゃあスピードがとろい上、支離滅裂な文章になる、そんなものただの単語の羅列に過ぎない……と、まあこれが闇小説を読んだことのない奴が吐く台詞だ。ところがど

っこいでな、闇小説はすでに、その他ジャンルのランキング上位に食らいつくまでの評価を得ている。わかるか、あり得ないんだよ。第三者による故意な評価操作なら、その反動による批判、酷評の嵐が必至だ、特に闇小説の無茶な書き方ならな。旅団の連中がその道理すら覆せる實力を持っているからとも、物珍しさが人を集めているからとも言える。そこで出てくるのがこの疑問だ、なぜそこまでして、闇小説を書くのか』

「……なぜ」

闇小説を。

ただの道楽にしては大掛かりすぎる。各ジャンルのトップを狩り出してまで、しかも並の作者では不可能な文体融合をさせてまで……そこまでして完結させる理由が、闇小説にあるのだろう。

ふとあの人物が浮かんだ。

——あたしね、思うの。あのあらすじは、小説中のことじゃなくて……、闇小説を最後まで読みきった人へ、本当に起こることなんじゃないかって——

キーを打つ達也。

半分は無意識に、半分は自分でも馬鹿げていると思いつつ、メールに打ち込まれていく文字を見ていた。

『一条も以前に似たことを言っていた。闇小説のあらすじは本文と全く関連性がない。完結まで読み終えた奴には……、あのあらすじ通りのことが起こるんじゃないか、と』

ある者は火を奪われ。

ある者は時の橋を渡り。

ある者は名画を手にした。

もし、このまま闇小説が順位を上げ、全ジャンルのランキングにまで脅かし始めれば何千という読者が闇小説に目を通すだろう。もし。

あらずじが本当に起これば、社会現象に発展する。

闇小説を読みきった者には、一体何が起こるのか。

久しぶりに探究心をくすぐられた気がした。その現象が起こる前に破壊するなど惜しい話、だが今の達也にはその回避策があった。花岡を使えばカンニング露呈と相殺できるものを得られる。

（俺とデブの接触を見た奴はいない。このままメールでやり取りしていれば、こいつを一条が気づく余地は……ない）

闇チャットが、文節中から作者のローテーションを解読できるほどの能力を持っていたことは驚嘆に値した。さすがに花岡も情報源となるこの闇チャットの“眼”は渡さなかったが、こうして横流ししてくれるだけで達也は十分だった。

しかし直感が告げる。

花岡だけでは、いつか必ず行き詰まりが来ることを。

タイムリミットは小説の完結まで。それまでに花岡への一条献上が間に合わなければ、旅団全員のウィルス感染策を強行せねばならなくなる。

ところが、これには問題点があった。

小説家になろうでは、作者と直接メールのやり取りができる『連絡フォーム』というものがある。よく名のある作家へファンがファンレターを出すあれだ。

無論やり取りと銘打っている以上、こちらからメールアドレスの入力をして、その返信を受けたとき初めて成立する。ただしこのとき返信がなければ相手に自分のメールアドレスを譲渡しただけに終わる。

達也の場合、この相手方は旅団。

そして今の自分は、執筆もせず評価もせず、昨日今日ちらほらとサイト覗いたような人間である。妙に闇小説のことだけ関心を持っているとなれば、ウィルスまでは見抜かれなくとも、確実に不信任は抱かれる。まして相手は一人ではなく、執筆のため頻繁に交わっている団体なのだから。

仮に全員のメールアドレスを手に入れた後、全員をウィルス感染させて、相互の連絡手段を破壊できたとしても、小説家になろうが残っている。『連絡フォーム』があれば、携帯を使ってでも他人のPCを用いてでも互いの連絡、闇小説の執筆が可能。さらにメールの履歴が残っていれば、達也は警察の御用というわけである。メールアドレスを変えて難を逃れたとしても、次なる手はないだろう。そこで自分とは逆の、サイト内で執筆もして評価もして、闇小説のことに興味を持っている人間――作者を手駒にすることができれば、達也が旅団へメールするよりも遥かに不信感を拭える。

ウィルスの方は、ネット上で噂になっているものを何とか探し出し、それを使うことにした。当てのない考えだが、闇小説を破壊しようと思えば、今達也が手に入れうるウィルスでは対処のしようがない。これが現状なのだから苦肉の策と言える。

（あくまで緊急の一手……にしては頼りねえな。くっそ、あの野郎何が作家単位なら、だ）

そして次なる花岡のメールを他愛もない文で返信すると、達也はPCをシャットダウンした。

チャイムが響き、朝のホームルームが終わり、途端に教室は談笑で包まれていく。そんな中、達也は教科書を片手にしていたが、頭では作者のことを考えていた。

（デブを作者にしたんじゃ意味がねえし、俺は登録時のアドレス流出を避けたい。一条でも悪くない、だが奴と今現在コンタクトが取れない。ちいつ、誰か適当に）

「あゝっ、朝から数学とかマジ勘弁」

と、達也の机に頬杖をつく桜木。席は離れているが、わざわざ達也の所まで来たようだ。その声に達也は一瞬、教科書から目を離さされたが、

「はいよ。この時間分の板書ノートは明日までにな」

と、苦笑を見せてまた戻した。

「いやもう、さっすが西崎。朝の数学なんか俺に取っちゃ馬に念仏なんだよ、ホント。やっぱ俺って文系人間だったりして」

——文系——

その単語が、はつきりと耳に流れた。

加速する血流、縮まる瞳孔、力が入る指先。

パァンと、達也が教科書を閉じて置いた。

桜木が驚き、

「何だよーいきなり？ まさかやっぱ貸すのやめたーとか」

「おい桜木、それならお前」

達也が歯を見せて微笑みかけ、桜木の胸を小突いた。

「小説家狙ってみないか」

MOVE10「名」

「いや、小説家ってのは誇張なんだ。ただ」

自分の足になってくれればいい。

思わずそう言ってしまうのを何とか留め、口元を緩ませながら達也は続けた。

「ただ……、サイトの名前がそうなってるんでな」

「どんなサイトだよ、それ」

この前ネット・サーフィンをしていたら、そう口火を切って携帯から『小説家になろう』を見せ、数分サイトを覗かせる。そこからの反応速度は速かった。このため桜木の作者化には、労力も時間もほとんどいらなかった。

元々この男には天性の社交性が備わっている。現に桜木は作者登録をするや否や、執筆に夢中になり、評価に夢中になり、わずか数週間でサイト内でできた作者仲間と実際に会うまでの成果を見せた。

——あとは時間だ、こいつが旅団と接触するのも——

そう思った矢先、桜木はその達也の考えをまたもひっくり返した。

「ごめん西崎、俺……脱会する」

机が揺れた。

「何!?! ……おい、なんだよ突然」

「執筆は正直おもしれえ……んだけどよ。でもそれが、他の奴から見えてくだらない作品だったとしたら、書く意味あんのかなって」

桜木が苦笑いを浮かべる。

達也は質問を加えなかったが、事情は察していた。

桜木の作品数は2ケタに上る。しかしそのどれも一日の読者数0が珍しくない小説だった。評価は皆無に等しく、たまにあったと思えば目も当てられない酷評。勿論桜木も改善に改善を加えたが、読

者数がわずかに増えるだけで変化は薄かった。

執筆が楽しいという言葉に隠されて、達也は桜木の心理を読み落としていたのだ。

（こいつ……、ただ作者を続けてりゃあいいもんを！ 無用な背伸びしやがって）

「でもな桜木、お前まだ作者登録して何日だよ？ もし脱会すれば、お前が楽しいと思いつながら書いてきたその小説も消えるんだぞ？」

「それは……まあ」

桜木は口ごもるとうつむき、達也の死角で両眼を細めた。

「すぐリタイアしなきゃならない理由はないだろ？ 俺もできる限りの協力はする。頭を冷やせよ、今は」

そのときは何とか留めさせられた。しかし桜木の目、言動から察した精神状態だけでも長くて2、3日。この間に何一つ好機が得られなければ、せつかく手にした作者の駒を失ってしまう。

（次の候補となると、今度はサイト内で作者をしらみ潰しに当たって……、それで俺に従順な奴を探し出すしか。ったく、計算すりゃ天文学的数字になるんじゃないかねえのか）

思えば桜木には日常から手を焼かされている。

何から何まで貸してくれ、教えてくれ。ここは思い切って、桜木を切り捨てるのもありかもしれない。あの男には能力がなさ過ぎる。力のない者など、生きていく価値さえ疑いたくなる。

そこまで頭で考えると、自然に笑みがこぼれた。

「これは行き過ぎ、か」

こぼれたといっても。

達也は何気なく廊下で窓を見た。

外は暗く、ついさっきまで指していたはずの陽光を隠すほど、石粒と入り混じった雪のような雲がじわりと動いている。この光景に、達也の喜怒哀楽を悟らせない顔が浮かんでいた。

普段の達也は、絶対に偽りの笑み以外人前に出さず、出しても他の人にはわからないようにするという妙な癖を持っていた。普通の

癖が世にある訳ではないが、一概にそれらは様々な境遇の中で形成される場合が多い。ところが達也のこの癖に限っては、物心ついていない子供の頃からあった。それこそ達也自身ですら知らず、気づかずのままです。

そして窓に映る自分の目へ焦点が変わった。

何ら変哲のない、ブラウンの虹彩。黒い瞳孔。ただ左目に至っては、最近突発的に激痛が起こる、それも何らかの怪事を伴って。

小声で呟く達也。

「……ジャガーノート」

左眼の異常はこの名前から始まった。調べてみるとどうやらインド神話で実際に登場するヒンドゥー教の神らしく、ヴィシュヌ神八番目の化身という位置づけのクリシュナがもつ異名、ジャガンナート（世界の主を意味する）が語源だとわかった。その神はかつて、こんなことが信じられていた。

この神が乗った台車にひかれて死ねば、極楽往生ができる——と。馬鹿げた迷信だと嘲笑するかどうかは人によりけりだが、ヒンドゥー教徒の中には本当にそれを信じ、ジャガーノート像を乗せた戦車へ自ら身を投げてしまった者が数多くいる。

——恐ろしい犠牲を強いる絶対的な力——

いつしかジャガーノートという名は、そんな意味を持つようになった。この名こそが闇小説を表しているのだとすれば、絶対的な力は例のあらずじ。ならばそれは何を犠牲にするのか。

しばし達也は、窓の左眼と目を合わせ続けていた。

するとフラッシュバックのように、とある横書きの文章が頭に浮かんできた。最初はぼんやりと、しかしやがてそれは、今本当に目を通しているかのように現実味を帯びてきた。

（何かの問題文……、いやこの文章は）

小説。

それが証拠に台詞で用いられる「」がある上、人物ごとの行動をわざわざ描写している。だから作文やなにかの感想文とも違う。ただ、そう断定できてもこの小説を知った経緯を思い出せない。まるで今自分が記憶喪失だとも言われているような気分だった。

そこで達也はハツとする。

一度だけ同じ状況があった、と。

『ない、似た場所すら頭に浮かばねえ。だがさっきは、たしかにここら一帯の地理を熟知していた』

だとすれば、この次に起こるのは。

こめかみからゆっくりと、一筋の汗が流れていく。それが、顎からこぼれ、床に落ちて碎ける……よりそれは速かった。

疾走の達也。

脱兎の如く、韋駄天の如く、あの友情を賭けて走った男の如く。廊下で数人と肩がぶつかっても足は止まらなかった。立てかけられた箒に足が取られても止まらなかった。階段で転げ落ちそうになっても止まらなかった。何も達也を止めることなど、できなかった。

「前に見たときから、そんなに時間たっていないんですけど」

ふと、一条が思い出したように本から顔を上げる。

それは調度佐々木がボールペンの手を止め、机にある手の平ほどの写真立てに目をやったときだった。

「え、何？」

と佐々木が振り向くとそこに一条は、いなかった。

「奈央ちゃんの目、あれから何かありましたか」

さっき振り向いた背からの声、すでに一条は写真立てを手に眺めていた。

一瞬驚きを顔にした佐々木だったが、すぐにそれを戻して何事も

無かったかのように手を動かした。

「……見える変化はないわ。でも、進行は確かかしらね。ほんと……まだ小学2年なのに」

写真には、頬を赤らめながらブランコに乗る女の子が写っている。笑った顔から覗かせる小さな歯が幼さを物語っており、一見して今にも走り出しそうな子供だった。

「祈ります。私」

と、一条が写真立てを無音で置いた。

「……ありがとう。最高の励ましだわ」

そして一条と佐々木は一言二言交わすと、何気ない談笑が起こる話題へと移っていった。それは互いが互いを気遣って、少しでも空気を和らげようとしていたからなのかもしれない。少なくとも、二人はそのとき時間の経過を忘れていた。

およそ3、40分が経過した頃。

佐々木は腕時計を見て用事を思い出したと言い、部屋を閉めるため一条へ帰宅を促した。一条が頭を下げて「さよなら」と言うまえに、佐々木はただ「ありがとう」と一言だけ発した。

この日は、それで終わるはずだった。

荒々しく開く戸。

スライド式のそれを開け放ったまま、男は頭を垂れ、息で肩を切っている。

そこからゆっくり顔を上げると、肩の動きは震えになった。

「初めてお前を探し、初めてお前を見つけたぜ……一条」

男は、西崎達也は、笑っていた。

佐々木が「君……」と言うより早く、一条が口を開いた。

「わざわざ会いに来てくれたんだね。どうしたの？」

「お前ならわかるはずだ」

一歩踏み入る達也。

そして笑みをかき消した。

「パラサイト・アイが俺に教えた、と言えばな」

MOVE10「名」(後書き)

申し訳ないです。また更新遅れました。

MOVE11「槍をもつ者」

芥川直樹…今日の一番いったきい！ みんな集まってるかよ？

鮫島不二夫…愚問だ。共同執筆後のこの会合は全員慣習化している。想定される緊急事態の確率を考慮しても、八割七分は固いな。

岩帽子…アタシもみーんなもおっ疲れまさあ☆ でももうチヨビ
つとでみんなともお別れなんだね（＞＜） グスン←←

MASAMUNE…会者定離

奇ダン爵…しかしよくここまで続きましたな。旅団の執筆方針に
誰一人乱れることなく、こうして完結までいこうとしているのです
から

芥川直樹…さっすが俺達☆

殺人狂…どうだかねえ？

芥川直樹…んだよ殺し屋！？ だったら他に理由言ってみろよ！

漆黒のロンギヌス…まあまあ落ち着いて。小説を共に書いてきた
仲間なんですから……

吟憂詩人…そうですよ。喧嘩するほど仲がいいって言うじゃない
ですか？

岩帽子…憂ちゃん天然（笑）

殺人狂…僕たちってさあ、今みんなどっかのジャンルの一位じゃん、すごいよねえ。でもそれっていつまで続く？ みんなさあ内心怯えてるんじゃないかな。読者の評価は永久でも絶対でもない訳だし。そんなときにこの闇小説の話がきた、あの常軌を逸したリレー方式を条件にしてね。だがこの作品にはちゃんとしてメリットもあった。作中に僕達一人一人が、ランキング一位に輝く自小説の主人公を出していいって利点がね。

M A S A M U N E…電光石火

奇ダン爵…つまり闇小説に熱を入れれば入れるほど、各人の主人公に当たる作品の読者が増え、評価を維持できる。それが我輩達の主な旅団参入動機と言いたいのですかな？

吟憂詩人…お得ですねー。

芥川直樹…ふっざけんな！ んなカルテルみてえなもんには手を貸した覚えはねえぞ！？ あいつが新しい小説を作りたいって言うから旅団に加わったんだよ、俺は！

M A S A M U N E…頭寒足熱

漆黒のロンギヌス…僕も芥川さんに同意見です。第一そんなことしてトップに留まるくらいなら筆を捨てます。

岩帽子…えー！？ 辞めちゃだよー（泣）

殺人狂…素晴らしい覚悟をお持ちだ、かっこいいねえ。だけど、足元の方はどうかな？

漆黒のロンギヌス…意味がよくわかりません。

殺人狂…まさか気づいてない？　ならいい機会だから教えてあげよ。試しに一週間くらいファンタジーのランキングを見ててごらん、きっと心臓がグチャリと噛み千切られるような刺激を体験できるはず…。いつか必ずあなたと対峙するだろうねえ。全力と、全力の一騎打ちでね。

御武運を。

そう文の最後に付け足すと殺人狂はその日の会合から抜けた。後に残された漆黒のロンギヌスはただ、まだ見ぬ宿敵を待つしかなかった。

「ちよちよ、一条さん。見てくれよこいつ、また順位上がったっての！」

「うん、上がってるね」

他に誰もいない一条と桜木だけのP Cルーム。そこから何か別の物語でも始まりそうだが、この数日間で二人の関係になんら進展はなかった、小説技法を伝える者とそれを授かる者という関係からは一時は桜木を切り捨て、別の有能かつ従順な作者を探そうとしていた達也に対し、パラサイト・アイが示した活路はその桜木を有能かつ従順な作者にするというものだった。

左眼は一条の姿を映した。

なぜ一条なのか、なぜ一条にそんなことができるのかはわからない。しかし決して遅くないスピードで結果は伸びてきている。このまま最後までいくことができれば、ランキング一位の作家達で編成しているいわば闇小説のブランドを潰せる。

そのとき何らかの形で、旅団は動きを見せるだろう。それが達也

にとって闇小説破壊の最大の好機になる、というのが表向きの話だった。

カンニングの証拠隠滅、闇小説読了者にあのあらすじがどう現れるか。この二点が達也の考えるパーフェクト・エンディングである。両方が転ぶか否かを握るは闇小説の完結日、それを知ることが必須だ。

まず桜木には何としてもランキング上位を脅かす作者になってもらう。そしてそこまでいけば知名度という名の武器が使えるため、協賛サイトへ片っ端から顔を出させて種々の作者間との交流の枝を広げる。そのとき旅団の誰か、おそらくは今現在桜木が属するファントジーの雄、漆黒のロンギヌスが、敵のことを知りたいというごく自然の心理に導かれて接触を図るに違いない。そうなれば。

桜木ならそこから、旅団との接触もありうる。達也はその隙をついて、ウィルスなどで旅団をおどせば裏から旅団を掌握でき、完結日の把握、調整もできるというわけである。

それまで一条が必要なわけだが、旅団を掌握した段階で彼女は厄介な爆弾をもつだけの者にすぎない。

しかし今の達也には、花岡がいる。

その頃には、彼の一条に対する雄としての本能も臨海点に達しているだろう。人気のない密室で一条と二人きりにしてやれば、花岡に起こる異変は知れている。暴走の欲望が満たされる行為を完了した時点で、一条は心神喪失の果てに証言能力を無くす。万一事が知れても花岡の供述と達也の供述では軍配は見えている。機は必ずや来訪する、それを待つだけだった。

下校時間を告げるチャイム。

あの伸びのある、ゆっくりとした音に合わせるよう、桜木と一条は談笑を交えながらP Cの電源を落として、そのまま部屋を後にした。

「でも桜木君、小説書くの上手くなったよ」

「え、マジで？ そりゃあれだよ、一条さんの教え方が天才級だから。一条さんがいてくれたらもう俺、夏目漱石とか司馬遼太郎とかと肩並べられるって感じ」

「すごいね」

「まずは今のファンタジーで一位取って……、たしか漆黒の、何とかって人がいてた気がするんだけど。一条さん知ってる？」

「うん。漆黒のロンギヌスさんなら、ちょっと知ってる。その作者さんはね、作品のストーリーや設定は勿論のこと、特に『台詞回し』がすごく上手いの。桜木君は、地の文って聞いたことあるかな」

「血の文？」

「小説の文章はね、簡単に言っちゃうと、会話文と会話じゃない文で出来てるんだよ。地の文はその会話じゃない文のこと。景色を描写したり、物語の説明をしたりする文は全部地の文なんだ。だけどね、漆黒のロンギヌスさんはその地の文を会話文で書けちゃうんだよ」

「……なんか、パツとしないけど、すごいのもそれ？」

「じゃあこう言ったらわかるかな」

PCルームから出て、階段を下り、靴を履き替え、校門へと続く道を歩き切った今その地点で、一条は初めて静止した。

なぜか車もない、人もいない。故に何も、音を作れなかった。

「その『台詞回し』で、漆黒のロンギヌスさんは過去に一作品だけ……台詞だけの短編小説を完成させてるの。それも全小説ランキングに入るものを」

息を呑む桜木。

台詞だけの。その言葉に脳内が支配された。

「……マジかよ」

一条はただ微笑むだけ。

そしてそのまま踵を返すと、背中越しで、

「ファンタジーの一位、頑張ってたね」

をその日の最後の言葉にした。

それから数十秒後に、校門で一条と家路が逆になることをやっと思ひ出す桜木を固まらせたまま、一条が彼の耳から足音を聞こえなくしていく。代わりに不思議とその頃には、車が通る生徒が通るなど、いつもの生活音が戻っていった。

MOVE 12「虫食い」

一条が帰路に着くとき、その歩調を乱されるときはない。

なぜか信号の色はいつも彼女を阻まず、なぜか自転車自動車はいつも彼女に掠りそうにすらならず、なぜかどんな猛犬も彼女には吠えなかった。そんな一条が、今日は十メートル先の電柱を気にかけた。

七メートル先でコンクリートの黒ずみが気になった。

四メートル先で真っ直ぐに伸びる影が気になった。

一メートル先で張り紙の剥がし跡が気になった。

そして電柱を過ぎようとするとき、

「ご指導お疲れさま……、とでも言っておこうか」

ついに足を止めた。

腕組みの西崎達也と黙視の一条弥生が、そこにいた。

「いつ、待ち合わせしたかな」

「これは待ち伏せだ」

と、両腕を解いた達也は、そのまま右手であの目の瞼に触れた。

「筋組織の増強、細胞の再生、眼前のものから遠方に至るものまでの透視、そして……こいつ自身のメッセージとなる映像の投影。ざっと俺が体感したこいつの力だ。ただ知っての通り相棒としては気難しくてな、タイミングはいつもこいつ持ちで、俺の体を支配する都度、脳を食う」

ジャガーノートの名を見たとき、花岡と対峙したとき、あの痛みはこれによるものだった。人間は右脳左脳、右手左手で神経が交差している。右脳とつながっているのは左手、左脳なら右手、だから右手の自由が奪われるとき、左脳——左目付近に激痛が走るのである。ただし、発動を終えると掌握した脳神経はまた達也に戻る。覚醒するたび、文字通り脳にとって寄生虫となる目、それがパラサイト・アイなのだ。

「いい友達ができたね」

「ああこれ以上はない繋がりだからな。だが、今んな話してねえんだよ。お前には聞きたいことが山ほどあるんだ」

右手が下げられる。

そして威嚇するがまま、左眼に一条を映した。

「なぜ闇小説を消そうとする、なぜお前はあれほどの小説の腕を持っている？ わざわざ俺を介し、桜木を介し、回り道をせずともお前なら一人でできるだろうが」

弱い犬ほどよく吠える。

もう一条には一生分の辛酸を舐めさせられた。その過去が今この現場において、達也へ冷ややかな沈黙を促す。一条は罵倒、詰問で掌握される女ではない。対等に渡り合うため、いるのは存在だけの圧倒のみ。

口を動かさない達也。

表情を変えない一条。

通行人は皆無、空は飛行機雲すら消えている。

汗が流れきるのを、ただ待っているだけなのか。それともこの状況が、目に見えない形で動いているのか。達也はわからなくなってきた。

やがて、不気味な夕焼けが、二人の影を伸ばし始めた頃、場に言葉が走った。

今は言えない――と。

だが達也は吠えない。

「その今はいつまで続く」

「それも」

と、口に人差し指を当てて一条。

そして達也の口が沈黙した。

目を細めた。拳を固めた。

そして歯をわずかに覗かせ――笑った。

最初は肩を震わせながら、吐息を掠らせる不気味な笑いだった。

しかしそこから一瞬だけ口を閉ざした後、笑いは声が聞き取れるまでの嘲笑になった。

「どうしたの」

一条の声が笑いをすり抜ける。

やがて加速度的に嘲笑をしぼめていった達也は、最後に大きく一呼吸した。

「そこまでコケにされちまったら……、笑うしかねえと思ってな」「すっきりした？」

「……ああ、たまには馬鹿になるのも悪くねえ」

小さな拳で口を隠す一条。

達也が怪訝にそれを見る。そしてゆっくり目を細めた。

「何がおかしい」

「変わったね。なんか……」

一条は手を下ろしたが、口元は緩んだままだった。

「余裕がある、ってカンジだよ」

「お前と相棒が――、いやそれを言うなら闇小説だな。たかだか小説に何人振り回されてるか」

「闇小説は、小説じゃないよ」

「人間は動物じゃねえってジャンルの討論なら御免だ。その手の話は結局結論が出ねえ」

「闇小説は生きてるよ、君の目と同じように」
同じ。

闇小説と、パラサイト・アイが。

だが切り詰めればデータと実体、イコール関係どうこうと言う前に次元が違いすぎる。

それでも。

「俺の目と闇小説が……互いに、呼び合っているのか」

「同化したいんじゃないかな。どっちかが支配的にじゃなくて、パラサイト・アイはパラサイト・アイのために。闇小説は闇小説のために」

「つまり俺がこうして闇小説を追っているのも、全てこの目が独断で仕組んだことだと、そう言いてえのか」

「……多分。もしくはひょっとしたら、かもしれない」

一条に会うたび、達也は決まって思うことがあった。

この女は何を知らず、何を知っているのか。

しかし、目の前に、いや指先にありながらも触れる前で幻影さながらに消える。それが一条という人間だ。だから達也はすでに知っている、ここまですが現実だと。

「ああ、そうか。ならこいつに關してもう聞くことはねえ。お前には桜木のサポートを引き続き頼むだけだ」

「奇ダン爵さんは何も知らないよ」

息を呑んだ。

そして目で、口ほどに信じられないと言った。

「……なぜ今、その作者を」

「知らないこと、わからないこと。西崎君が嫌いなものだよね？」

そんな君がどんな事情だったとしても、無知を無知で終わらせるなんて絶対に、絶対にありえない。ならどうするかな？ 簡単、直接情報源と接触すればいいんだから」

たしかに。

それは子供でもわかる図式だったが、

「ならそこで奇ダン爵が何も知らねえつつうのは話が矛盾するだろ。旅団の一員であり、パラサイト・アイを小説に書き起こした張本人なんだぞ」

「奇ダン爵さんはね、小説家になろうでただ一人の、『鍵小説』を書く作者なの」

——鍵小説とは——

実在する人物の名を変え、それ以外は事実を描くという小説のこと。作中のどこかで“鍵”を見つけると誰の、あるいは何の事件の話かわかることから、この名がついた。

「だから、それとこれがどう関係して」

「うすのろ」

冷ややかな旋律が、全身を駆けた。

今一条が発したのは、敵意を、そして殺意をも匂わせた声。

「お前……今」

手の震えを抑えられない、情けないほどに。そして一条が彼女自身
の瞳へ、照準さながらに達也の目を映した。

「奇ダン爵さんがどうして十八番と呼ばれるまでに、どうしてラン
キングの一位に立てるまでに、数あり質ありの鍵小説を書けるか、
わかるかな。簡単に言っちゃうと、彼がそれほどの情報量を持って
いるからだよ。情報屋。“小説家になろう”で奇ダン爵さんが持つ、
もう一つの名前で、顔で……。だけど、限られた人間しか知らない
の。彼と情報のやりとりをするためには、それ相応の対価が必要だ
から」

そこまで聞いて、達也は合点した。

奇ダン爵は情報屋、情報を売っているのである。それは金が絡む
かもしれないが、おそらく小説家になろうでの対価とは、故意な作
品評価、あるいはそれ相応の情報。

前者を取れば、己が名を。

後者を取れば、己が小説に。

連鎖に次ぐ連鎖の果てが、今の奇ダン爵の地位。ならば他の作品
の執筆も、評価もしていない達也の評価などでは闇小説と対等にな
るわけがない。そうなれば後者が必然となり、達也が持ち出せる情
報は――自身がパラサイト・アイの宿主であること。

できるわけがなかった。

せっかく今まで桜木や花岡で、間接的に旅団と接触しようとして
きたものを泡にし、ここにきて自身をさらけ出すなど。奇ダン爵が
旅団の情報の中樞を担っているとすれば尚更、ウィルスを目論んで
いる達也の存在を知られるわけにはいかない。

（強行すれば奇ダン爵は確実に食いついてきやがるだろうが……、それは俺がパラサイト・アイを立証できたときの話。こいつの発動はこいつ持ち、んなもんどやうやって説明すりゃいいんだ）

「これでわかったよね」

一条がどこか安心したような表情を見せた。

「……俺と、奇ダン爵の接触を止められてよかった、とでも言いたげだな。まあ一理あるがな。だが――」

「そう、諦めないで」

「当たり前じゃねえか。俺の弱みを握っておきながら一条が微笑む。」

それは達也への賞賛か、はたまた秘たる悪意か。

しかしそんなことよりも、その後一条が、

「駄目だよ西崎君、いつまでもそこにいたら。ほら、タンポポに陽が当たらない」

と出した台詞が脳裏から離れなかった。コンクリートの地面で弱々しくも咲く、その黄昏と同じく。

「ひひひひ……、やっぱり僕って天才だあ」

にんまりと緩ませた口元から、花岡はよだれを垂れ流させていた。いつものようにキーボードにかじりつき、ディスプレイにかじりつき……、そして最近できた、達也へメールする習慣。

習慣というものは変えられない。しかしこのときの花岡のメールは、達也の状況を大きく変えうるものだった。

――すげえことがわかったぜえ、マジでよ。イスミ旅団には芥川直樹、吟憂詩人、M A S A M U N E、殺人狂、漆黒のロンギヌス、奇ダン爵、鮫島不二夫、岩帽子の作者が八人いるが、そこにはもう一人存在する。イスミ旅団の、『九人目』が――

MOVE12「虫食い」(後書き)

今回の更新は酷すぎました。(汗) ちゃんと連載していきます。
後、補足情報です。

『焰ノ巫女』

かつて三日間だけ、全ジャンルのランキング一位にその名を載せたといわれる幻の作者。いくつもの文体を持ち合わせていることから“万化の妖狐”と異名がついていたものの、現在作品はおろか作者登録まで抹消されており、旧掲示板のどこかにその逸話を残すのみとなっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2260c/>

闇小説

2010年10月17日02時22分発行